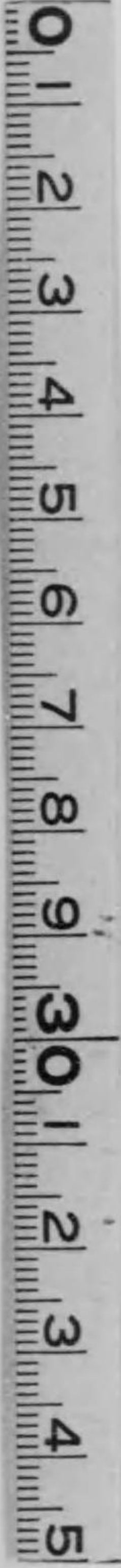


11

526

龜井茲矩傳

第八卷



始



亀井茲矩傳 第八卷

亀井伯時寄贈本

元春全日
上月城を圍む

是の年四月元春隆景直家と兵七萬を合せ、上月城を圍む。秀吉來り援け、高倉山に陣を、信長



一之秀吉を援けしむ。元春織田氏に全軍
至らんことを恐れ、急小城を攻む。秀吉
之屬せ、六月、至り秀吉信長の出陣
を佐久間信盛明智光秀等抑へ、これ
を命を秀吉に傳へ、連小高倉の陣を撤じ、精

三木一家を攻めしむ。秀吉為在所を知らず、時小
茲矩の勝久の命を以て、從ひ、秀吉の陣に在り、
真書大岡記の上月より山中に婚の亀井新十
郎、いそがし、鹿之助の使として來り、秀吉に、



秀吉首を獲け
茲矩と上月
城下遺す

新十郎の味方の様云々とあり秀吉竊るに茲
矩を召出さず曰く予の上月城を後援するに、数月
あり功を奏せず然るに今我軍衆心一致せば、
信長の出馬を請へども佞臣等之を拒み予ハ遂
に此の陣を收め三木城を圍むことを命せら
れ、今將小陣を書寫山に移さんと其想ふに上月
城の陥ること雖も旋らさしらん、汝今夜潛り小
城に入り奇襲を告ぐるに此の事を以てせよ、若
し城兵圍を衝き出せば秀吉亦進み敵軍を
破り、尼子主従を助け、俱に書寫山に退くべし、
然れども汝萬一虜となり計洩るゝことあらば、
信長の喚を免れざるべしと、茲矩奮り曰く是れ

大野十兵衛
高橋孫四郎
子廣

公の使あり又右府(信長)の使あり、從令虜とあ
るも何を辞さべけんや、萬一公に疑懼の念生
ませば、茲矩の妻子を出し、之を質とすべしと、秀吉
其の決志難く赴くの勇を感ず、茲矩小意不應を
その勇士兩人を具在することを許さ、則ち大野十
兵衛某(尼子左衛門督義久)令限帳總侍衆の内、伯
州の内四千石大野十兵衛備中、の内七千石高橋
推之進也、高橋孫四郎孫四郎子廣子廣の名高橋家譜
に據る、子の字茲矩の舊名之子の片諱を與へら
るあり、の二人を選む、秀吉先づ二勇士を茶代と
さす、各知行二百石苑を與へ、茲矩不謂て曰く、若
し此の使を為さざれば、是れ今回の合戦第一の

秀吉茲經小出
雲國と興する
の約

功ねるべし、依りて出雲國主と為さんと、茲經乃
ち若し生を全うせし城内に入りて號火を起ぐ
べしと約し、六月二十三日の夜、大野高橋の二人
を従へ、高倉山の陣を出で、闇夜に乘じ敵の重圍
を穿ち上月城に入り、秀吉も特々終夜物見當を
置き、宵二時ハ平野權平次、中夜二時ハ石田左吉、
曉二時ハ寺澤忠二郎と為去、終夜寝ねむし、號
火の起るるを候つ、寺澤忠二郎、曉七つ半時ハ
互り煙火起る、茲經既ハ城に入りて、幸盛亦會
奥さし告ぐるに、秀吉の意を以て去、幸盛曰く、秀
吉の厚誼ハ誠ハ謝する所あり、今圍を衝き身を
以て免生人ことハ、敢て難しと為さず、然れども

山中幸盛の
決心

新見國行の
刀

籠城の士女二千三百餘人、其の命一予ハ雙肩
ハ繫る、孤城獨立、寡兵を以て十萬の敵ハ抗ふ能
く六十餘日を支へ去ハ、洵ハ士卒忠勇の致す所
あり、今義を捨て、生を取らんこと吾志ハ非也、
汝還りて秀吉ハ謝去、且つ予ハ決心を告ぐよと、
茲經志の奪ふハ可らざるを視て、其の言ハ慮ハ
從ふ、幸盛別ハ臨み、秘藏する所の新見國行の
刀を執りて、茲經ハ撥く、茲經辭去、曰く、不肖茲
經、今使命を果せたりと雖も、若し萬死を免せし
復命するハ及び、茲經ハ死を期せし、其の實を貪
れりとの謗阿らば、其の耻辱を如何にせんと、幸
盛亦強ひて、

佩弦齋雜著刀叙録を按ずるに、山中幸盛の佩
ある處の國行寶刀新身と稱す、尼子勝久將に
自殺せんと志、幸盛に謂て曰く後事唯汝が力
に賴る汝死する勿れと、幸盛泣て曰く死ハ臣
不分の事、嗚呼誰の主君の爲め、死を復する
者あらんと乃ち倅り降る、輝元其の刀を獲る
後ち之を考去に獻せ、考去當る輝元に謂て曰
く、卿新見國行を獻せ、清水刀四部と二刀ハ我
常に佩服せし不慮に備ふるに、卿と小早川
氏と我に事へ、折衝禦侮此の刀の如く、奈利、刀
と卿とこれ皆吾が寶ありと志る、志をの則ち、
幸盛が茲に授けんとせし名刀あり、此の刀

は後ち徳川家康に傳はり、今尚ほ公藏徳川家
小藏せりとある、
中央新聞第一千三百七十一日發行
小名刀の
由来と題して曰く、山中が所持して新身國行
といふ刀ハ、實に稀世の名刀なり、其の毛刺輝
元初め之上段に、時之を太刀に獻じ、太刀
強の外の秘藏なり、幸にこの新見國行と骨喰
藤四郎とを帯びて諸將に誇つたといふ、この
後徳川家康に傳はり、現存も公藏家にあり、
心、織田信長の不勅國行、豊太刀の新身國行
徳川家康の三池の徳太刀といづれも無双の愛
剣である、

○按かゝる小園行鑿刀を勝久死に臨み之、幸盛
不授けしものあらば幸盛これに茲に不與へ
人とせし身實に違へり、こは勝久死に先古
已に幸盛に授けたりしものならず、茲に幸盛に
訣別の際其の刀はやく幸盛の手にありしもの
のあらん、然らざれば身實に不へり、姑く記し
て後考を俟つ。

茲に茲に訣別去る歸途につく、突然敵の騎兵に
誰何せられれば答へがし、直に刀を抜き斬
らんと欲す、暗夜誤りて谷底に落ち藪中に忍び
曉に及び漸く高倉の陣に還ることを得たり、
此の時茲に頸部を打撲傷をうけ、終身疼痛を覺

茲に復命

元たりとぞ、茲に幸盛に決心の状を秀吉に復命
在るや、秀吉益々幸盛の志を歎か且つ茲に不勇を
賞さし手を執り涙を揮つて曰く、我れ必ず信長に
稟去り汝に出家願を與へんと、秀吉の高倉山の
陣を撤去し書寫山に移る也、上月城ハ士氣大に
沮り謀の出づる所を知らず、幸盛乃ち使を敵軍
に遣ふ、首謀を誅去り以て一城の命を贖はんと
とを請ふ、元春隆景曰く、勝久氏久等を去り自殺
せしめば其の請を許さんと、幸盛泣いて勝久に
謂ふ曰く、身既に此に至り君請ふ自ら計を為せ、
臣は併り降りて元春を刺去り以て泉下に復命せ
んと、勝久後身を幸盛に囑ふて自殺せ、城兵悉く

勝久自及し上
月城陷る

奇盛死を

出づ去る奇盛進み元春の面を然れども警衛
其が嚴しき近づくことを得ず毛利氏兵を發
し、奇盛を備中松山の本營に護送す、途甲部川に
至り人をしりこれに阿井渡に誑き殺さしむ、奇
盛時小年四十五、薨す七月十七日あり、

大野氏覺書に曰く明知日向守ハ、山陽道筋被
仰付候處丹波一國未治を處之助見及信長公
へ使者を遣ひ羽柴筑前殿ハ播磨國を治め佐
用郡の内上月之城を指へ山中處之助を籠置
候處毛利輝元數萬人に之押寄城の堀際より
二三回仕寄を付け責むる所を羽柴筑前為
後詰上月之東高倉を本陣にとり先懸の兵に

と、及度々合戦筑前殿より信長公へ後詰を被
取候者筑前守ハ美作より備中へ通り毛利輝
元ハ人数の後をしり候ハ、輝元ハ人数可
背軍之由數度使を以て申上候處、信長公之
家老佐久間右門を先とし、今度上月の城よ
り毛利家背軍の時ハ、羽柴筑前山陽道を治め
候へばと思ふ心根あり、今度信長公御出馬に
てハ、申上被為成間敷候、左様候へば、御大事之
儀に候間、御出馬之儀必御無用と、面々被申上
候、城より引取可罷上候由信長公より御奉書
被下候、就夫右之趣を城内に之助へ被仰遣度
之由、筑前殿亀井新十郎を御時以候之被仰聞

城中より鹿之助坊又出候者筑前殿直下御引
取可成之旨新十郎御相討候へば城中火
事の儀より御座候間新十郎参り直下鹿之助
下申候御意之通不可仕之由申上候へば新十
郎を遣ひ討死仕候へば信長公之御前如何と
被仰候新十郎を筑前殿無御心元思及右之通
被仰と存新十郎伴七歳下成候鬼太郎妻女ハ
鹿之助娘役等も播州姫路に御取置候へば何
か無御心元思及儀より無之候間新十郎を
城中へ御入候様事と付候へば右と思及城中
へ可有御入之由被仰何れを召連参者在之候
かと御尋候大野十兵衛と申者右從城中鹿之

助所罷出懸御身候其の節御腰物被遣候高橋
孫四郎と申者若き御心候へ共數度之手柄
を仕たる者より候右兩人を召連可参上申候
へば則被為咄御目見仕候へば新十郎儀ハ信
長公より出雲國へ可被遣候右兩人之者ハ度
々之忠節仕候條新十郎所より立身可有之由
被仰筑前殿より右兩人へ為奉代知行貳百石
宛可被遣と御直判十兵衛孫四郎に被遣候
天正六年戊寅六月二十三日の夜新十郎右兩
人を召連城中へ忍入其節筑前殿無御心元思
及新十郎無意城中へ入候ハ從城中相圖之
次を立候へば、^簀簀を御付候之、終夜物見番被仰

付宵二時ハ平野権平次二時ハ石田左去、曉二
時ハ寺澤忠次郎ハ相箇ノ火を見候へと、被仰
付一時ハ二度迄相箇ノ火ハ不全候哉と御使
被遣、筑前殿ハ不被為寢無御心元思召置、寺
澤忠次郎、黃曉方七、以申時、合城中ハ火を立候、
此ノ通申上候へハ、筑前殿御身堵被置候新十
郎、忍入候事仕寄之者トモ存候故、其ノ翌日ハ
夜ハ城中より出候事不成、二十五日夜城中を
忍出候處ハ何者モトト示ぬ候也、是答不成を
可討果と仕所ハ、各底ハ考ち敷ハ以、忍入、夜
明ハ高倉へ参着候、其ノ節ハ、首を打ち存
坐之内相煩候、庶之助より筑前殿へ御返事申

上候様ハ、上月城中ハ推籠候諸勢我等一人を
目下懸付、二心なく防戦侍七百餘人之者五十
百位ハ召連露出、相残五六百の者相果候事、不
便千万候間、我等一人城中ハ切腹仕、相残者
共助可申と覺悟相完候間、重而个様之儀被仰
欺間敷由、筑前殿へ御返事、新十郎被申上候へ
ハ、筑前殿新十郎手ハ御取付不便之儀と被仰、
此の上ハ新十郎ハ出雲國を被遣候様ハ信長
公ハ可被仰上之條、左様相意得候へと、筑前
殿落渡被成候、

亀井家由末ハ曰く、毛利輝元數万人ハ、押寄
也、追々城ノ搦渡より二三間ハ仕上也、在り付

責むる所を羽柴筑前守殿後詰とす、上月の
東高倉山を本陣と取り度々合戦不及、筑前
殿より信長公後詰許成候に、筑前殿の某作
より備中へ廻り輝元の人敷を折崩し候に、
輝元敗軍可仕由、使者を以て仰上らるゝと雖
も、信長公の家老衆筑前殿勝利の上、猛威不
保こり大功を立人ことを猜んぞ、信長公の御
出馬の儀を差留許申之、高倉後詰の御助勢
無之、就其右之趣城内山中松之助に被仰遣度
之由、筑前殿免井新十郎に被仰陣候、城中より
松之助切之出候に、筑前殿の高倉より押寄
七人数を御引取可仕成、尙新十郎に被仰陣候、

此邊火事の儀より御座候間、新十郎参り直下
松之助に申合候意に、通し可申合候、新十郎の
罷越しより其の趣松之助へ申聞申べく由申在
といへども、多勢に取巻られ討死いたせせ
は、信長公の手前いかゞと思案取りけるに、新
十郎申在やう、筑前殿御使と申、信長公御為
めの儀に候間、何れの道より御用立候段に、
同前之儀に御座候間、是非私に被仰付候へ、某
罷入松之助に御意之趣申聞也、首尾相應候様
不可致相談通、再三申上候へば、右と思召城中
へ御入可有之由被仰如何ある者を召連罷入
候へんやと御尋被成候間、大野十兵衛高橋孫

四郎と申在兩人供下召連可罷入通申上候孫
四郎と申者若輩者下候へ共、數度之手柄を
仕托る者下候、又筑前殿被仰候へ、新十郎下
ハ出雲國七可被遣臣間右兩人之者度々之忠
節仕候由臣間、新十郎所より領地可被先行候
へ共、筑前殿より先知行高百石宛可被遣と云、
筑前殿御書判右兩人へ銘々下被下候、天正六
年戊寅六月廿三日之夜、龜井新十郎右の兩人
を召連、城中へ忍び入る、其の節筑前殿無御心
元思召新十郎無急城中へ入り候はじ、相齒の
火を立す候へと、終夜物見番被仰付宵二時ハ
平野権平次夜中二時ハ幸澤忠次郎、曉二時ハ

石田位吉亦、相齒の火を見候へと被仰付、遂
間も無く相齒の火ハ不生哉と御使被遣、筑前
殿も不致為寢無御心元思召候處、幸澤忠次
郎番丑之刻ハ城中ハ火を立て候を見付、則申
上候へハ、筑前殿御安堵被成候、新十郎ハ廿三
日の夜忍入、翌日一日處之助と談合仕、廿四日
の夜未だ城中より忍び出高倉御陣へ参り、處
之助よりハ御送寺を申上る、其の送答ハ、上
月城中ハ指籠百諸替我等一人を自懸付、防戦
仕る侍七百餘人御座候右之者共ニ切抜付
候と云、其の妻子或ハ手負或ハ病人を殘し置
す無伴下相果候事不心人之儀ハ御座臣間、我

寺一人城中より切腹仕相残る者共助し可申
と覺悟相極む候間重而々様之儀設仰遣同鋪
之由、筑前殿へ返事申上候へば筑前殿新十郎
が手子御取付被成此の上ハ新十郎子出雲國
を可被遣候條、左様相心得候へ連、筑前殿御啓
涙被成候、

茲維公御武切書し曰く、明智日向守小山陽道
筋退治之事信長公より被仰付候處丹波一國
未だ治らば、其初處之助より信長公へ使者を
献じ羽柴筑前守殿御手子被仰付被下候様被
相願火より筑前守殿手子應和備州佐用郡の
以上月之城を治之助に被下西國筋の押へと

しに事子、然る所小毛利輝元數萬人のく押寄
也、追日城の堀隈より二三箇お仕よせをつけ
責よせ、羽柴筑前守殿後詰としく、上月の東高
倉山を本陣不取り度々合戦不及、依之備中
へ廻り輝元之人数を押崩し候はば、輝元敗軍
可仕由、信長公へ被仰上つけども、家光衆筑前
守殿勝利の上ハ、権威不ほあられ人等を左様
从信長公の御出馬之儀差留られ候け、高倉へ
後詰の御助勢あり、然る上ハ筑前守殿高倉へ
押寄共、處之助ハ城より切ら出人数を引取べ
き由、此趣城中の處之助へ申遣し度、由子候へ
ども、數萬人の敵陣の内を通り、誰れ行人と云

ものこそおき所は新十郎罷越し其趣慮之
助へ申聞べく由申といへども多勢不取巻れ
打死致させ候へは信長の手前いかいと思案
有けるは新十郎申けるは筑前守殿御使とい
申おのり信長公の御為の儀不候何れの道不
ま御用不相立候儀の同様の事不候へば是
非私罷越慮之助へ思召之趣申聞首尾相應仕
候様相談可仕者申す然らば城中へいふや
うある者百連罷入申べくやと有之時大野十
兵衛高橋孫四郎と申者兩人百連罷入候事と
申其時筑前殿は申は新十郎は出雲の國を
河津遣候と兩人之者度々忠節仕まつき新十

郎より領地へ宛行候へども筑前殿よりたま
づ知行百石宛遣をべくとて御書判右兩人へ
銘々お被下こゝろ八天正六年寅年六月廿三日
の夜馬井新十郎右兩人を百連城中へ忍び入
る筑前殿は心元なく思召新十郎無難お城
中へ入らば相首の火を上げ候へとも終夜物
見番仰仕られ宵二時ハ年野推平夜中二時ハ
寺澤忠次郎曉二時ハ石田佐吉隨分氣を附火
の手を見合々罷振仕候所猶御心元なく
思召未だ火の手見えず申哉と度々番人へ
御尋ありしに寺澤忠次郎番手お城中お火を
立候を見申上候へば筑前殿御安心は成候

新十郎ハ庶之助と謀合致し、廿四日の夜又城
中ヲ悉ビ出高倉御本陣ハ歸リ庶之助ヨリノ
返答申上ル、其返答ハ「城中七百八人程ノ人数
具外妻子等トテ、我一人ノ為ニ命ヲ捨サセ候
儀不任」ト候ヘバ、城中除ルカニク候間、我等一
人切腹仕城中之者ノ命助付度候ヘバ先切腹
ト覺悟仕罷在候由、羽柴殿ノ取計情トク存候
趣筑前殿ハ新十郎手ハ取付御燕泣ノ由、
亀井家寛永京首ハ曰ク、毛利輝元ハ五万人兵
攻圍上月城十重秀吉ハ為救之ハ盡兵興ハ高田敏高
陣于播州高倉山、先鋒兵興毛利兵戰散度雖
似有利、彼大軍也、我兵不及万人、遂不得近城下

乞援信長曰、於播州御進發者、我自某作廻備中
絶敵後是棟而擊之利也、信長興群臣議佐久間
信盛猜秀吉之立大功、強止發、上月之援既絶、
秀吉情慮助死、呼茲ハ詎告曰、庶助衝突出城、我ハ盡
高倉兵而可引取、然而恐謀漏洩、往可告之、宋若
逢敵被擒者、必遣信長、知是以默止、茲ハ詎曰、是非
秀吉之使、即信長之使也、我盡忠死者、本意也、我
必可獲万一、令他人生、則我何面目而事君哉、秀
吉服其理、以何者為同伴哉、茲ハ詎曰、吾具大野十
兵衛高橋孫四郎二人、秀吉先賜二人于米地、茲
詎無事故而還、則必歸出雲國、約日入城中、必揚
旗、六月廿三日夜、茲ハ詎及二人、忍入城中、秀吉通

霄不獲待合齒火丑刻揚火高倉陣中奮氣聖世
四日相對凝許戲庶助日城中兵七百人其命在
我突出潰圍妻子病人痲瘡者如何而遁哉捨人
立己我心不為我一人切腹而欲扶救百人命考
去息惠雖謝汝其忠誠茲矩乃方諫不聽曰
我不食言矣入夜茲矩惜別庶助出堂代斬身國
行刀與汝為遺物茲矩辭曰不敢受之我入不測
城遁乃死尤可難城中人皆言不鬼身死孰欲受
刃我死後不欲受貪名庶助亦不強取手永訣茲
矩夜半出城走于高倉陣言庶助忠志秀吉取茲
矩手泣曰必與汝于雲州踰月庶助卒盛切腹城
中人退散庶助流落諸國擇其死而仕非為身也

報厄子旧息欲一獲雲州以茲矩為厄子後有志
不遂惜哉庶助討死後士卒悉屬茲矩秀吉善過
焉

武聖社之碑文曰人屬豐太周討毛利幸盛時
以寡弱守上月城敵大軍圍之陷在旦夕太周謂
公曰子能軍身侵圍入城乎謂乃舅曰與其徒死
毋益不若遺城未為後齒子揚火乘圍衝突我將
殲敵後來擊之此求一生於萬死也子其速決焉
公乃易服夜潛越敵入而致意將與共去幸盛曰
奮力跳蕩排威穎脫我雖老矣猶或能之棄鄉里
子若舉城棄爛於敵手則我不忍焉我將自殺後
敵城以蘇庶生舍我取生非吾志也與國之任往

矣、子勉哉、公感泣而訣出、以天命、太尉撃節歎其
借善難善、幸盛已亡、群下瓦解、尼子餘類擁_二旆_一、
一方、不受人制者、公一人耳、其故將望族多吝食_二
門下_一、子孫遂為巨者、抵今不為少、人咸服幸盛_二謹_一
鑑云、

寛政重修諸家譜料、日本文武、曰く、六年の春、太
尉播磨國にせめいり、國中過半をびきり、
し則ち幸盛を、上月城を守らしめ、西國の
押とあし、太尉ハ安土に歸るのところ、毛利輝
元、五萬餘騎を率ゐり、上月城を圍む、太尉これ
を救はんがため、黒田孝高と、毛利兵を募り、
同國高倉山に陣を、茲にこれをしたる、

毛利利の兵と合戦、數度および、少く利の
るお似たりといへど、敵大軍より、味方の
兵上月の城下におかづくことを得ず、これより
より、太尉お府に援兵を請ひ、いはく、もし御出
馬あるにおい、某ハ兼作より備中の廻り、
敵のうしろをたむ、これさし、ハ、女に討つ
の利ありとあり、右府群臣とこれを議を、佐久
間信盛、太尉の必功あらんことを、おねがひ、しき
り、これをとい、め、おねがひ、右府其謀に、したる
い、援兵を出さず、こ、お、お、い、太尉幸盛、
力盡き、戦死せむことを、おはれ、み、茲に、
さま、い、はく、幸盛も、し、城より、突、い、ら、出、ら、バ、我

北兵を在、めく城兵を引き揚ぐべし、其のれ
ども計略のむれむことを略る、改志のびく城
中、小いたり、密に幸盛に告ぐむや、其のれども
汝不幸あり、敵のとりことあらば、右府これ
を懐らん、こゝをまつる意を決するごとあら
はむと、茲に陣す、これ君の使にあらむ、則ち
右のつかひあり、敵のとりことあらむ、何ぞ
請せむとし、餘人をいり、けり、めむ、小の何の
面目あり、さふた、いづつあへむやと申し、けれ
ば、太閤大い、これを感じ、其の意に應むるも
のを召具をべしといふ、茲に、大野十兵衛、高
橋孫四郎、某を具せん、とて、太閤先、二士、小衆

地をあらたへ、尋逢ぐる、おた、ハ、茲にをいり、お
雲國の主とあすべしと約し、本に城中、おいら
べ、必火を揚ぐべしと命せ、六月二十三日の夜
茲に、等城、中、おいら、のび、いる、太閤、い、ね、おいら、合
圖をまつのとあり、丑の刻、おいら、けり、火を
おいら、二十四日、茲に、太閤、の、おいら、を、幸盛、に、告
ぐ、幸盛、い、は、く、城、兵、七、百、人、の、命、おいら、あり、突、き
おいら、て、圖、を、や、ぶ、る、と、も、児、女、病、者、手、負、の、者、お
互り、さ、ハ、の、か、ろ、こ、と、を、得、せ、太、閤、の、厚、恩、謝
し、おいら、し、と、い、へ、ど、も、人、を、おいら、さ、く、おいら、の、ま、を、お
てん、こ、と、ら、おいら、意、おいら、あら、む、おいら、と、り、腹、切、く、數、百
人、の、命、を、まつ、た、う、おいら、べ、し、汝、高、倉、の、陣、おいら、歸、り

又、この趣を告ぐべしとあり、茲龍強ひて諫む
 といへども、わが一言に承らばとて、つ
 いに承らば承らば、夜に入る者、盛龍承る所を
 を先づ、代々傳へる所の國行の刀を承らへ、
 遺物と云、茲龍承るべし。これをうけば、我不測の
 城に入るといへども、萬死を承らねこれか
 ねし、しるるにこれをうければ、城中みな已に死
 をおぼしむ、おぼしむ欲しおぼしむるといふ人、我が
 承る死後のそしりを承つと、いひて互に承るを
 とりて承るおぼしむかれを承るべし、夜半に城を出
 て、高倉の陣營におかへり、承龍が忠誠の志を告
 ぐ、大岡茲龍が身を承とつて注いでいへば、必汝

小雲州を承らへんと、翌日有盛切腹し城中の
 兵退散せり、これより有盛承らしたるおぼし
 なるの士卒ことごとく茲龍の属也、
 本朝武家諸姓令脈系齒略し曰く、茲龍久秀征
 伐之時、奥山中、有盛徒行、於信貴城、得川井氏之
 首、後仕於秀吉、公同六年(天正)與秀吉謀而到上
 丹城、茲龍秀吉之命、有盛、
 三翁藏玉針し曰く、天正六年播州上月落去、
 危子勝久、山中、有盛籠之(申路)七月三日、勝久自
 殺す、有盛の偽り降参す、遂に備中安井、渡り
 して、打果

信長公記より曰く、天正六年四月中旬、藝州より

毛利、小早川、宇喜田を初と云ふ、中國の僅人數
器出、備前播磨美作三ヶ國之境自在之、上月之
城山中麿介兵城取巻志大龜山、中國衆取上、
着陣之由注進候、則羽柴筑前守、荒木攝津守、西
人霧立、高倉山に追々と對陣也、雖然高山を下
下り之谷之隔、熊見川を隔之間、上月城可身續
行無之、五月朔日、播州に成御勤座、東西兩國之
人數膚合討勝、而圍に在限、而可殺御討之旨、被
仰出、處に依久岡、瀧川、蜂屋、繼任申在様、播州之
儀、ハ峻難を控へ、隔節所要害を丈夫に構居陣
之由、承取候、何れも霧立、被の様子見計候と可
申上候間、被加御遠慮尤之由、各達之御異見也、

寅四月廿九日、瀧川、繼任、惟任出陣、寅五月朔
日、三位中将信忠、北畠信雄、郷織田上野守、神在
三七信忠、永岡兵部大輔、依久岡、尾州、濃州、越州
三ヶ國之御人數、之御出馬、其日、郡山御陣、翌
日、兵隊六日、ハ播州之内、明石之並大窪と云
ハ在所御陣と云、云ハハ候、先陣御敵城神志、云
ハハ、高砂へさし向、嘉古川近邊、ハ野陣を懸、中
ハハ、五月十三日、信長公可殺成御勤座候旨、被
仰出候處、十一日、乙刺上り、雨強く降り、十三日
午、刺迄、夜日五日、雨あらく、子り續き、洪水生、被
敷出、被候也、笠茂川、白川、桂川、一面ハ推渡、ハ都
ハ小路、ハハ、十二日、十三日、雨日者、一ハハ流上

京舟橋之剛推流水小瀨人餘多横死候也、村井
長門新敷、祓懸候四條之橋流れ、今様洪水小
候へども、今迄信長公御出陣と候へば、御目
取の日限相違無御座、御座の依、御舟小くも可被
成御動座無之儀を存知、淡島羽守、真木之島、
山崎之者共數百艘、五條油之小路迄檣械を立
て候、此等趣言上之處、不利御祝着候也、寅六月
十六日、羽柴龍前守播州上り、露上、一々被得御
説之處、謀略不相調、張陣候、之も無油、但願先此
陣引、神吉、志方へ押寄、攻破其上、三木別所、搦
取詰繼可然之旨、御出陣、神吉城責御候使云々、六
月二十六日、瀧川惟任、惟任、惟任、人数三日月山へ請

手引上、羽柴龍前、荒木提守、高倉山之人數
引拊書寫、近諸方打網、次日ハ神吉ハ城取詰、
豐鑑長濱、真砂の條、小曰く、天正五年十月、播磨
の國を信長より考書、小預、小給へば、彼國へ行
き向ひ、東播ハ丹波、隨いつきし中、小も、小寺
官兵衛ハもとより心おし、ふか、りけり、西播
佐用、上月の撃、ふか、あふ、お、りけり、後、の
輩、小軍を向け、上月の城を荒し、其の外、名むく
を、お、い、ま、し、ぬ、隨、お、を、心、お、し、上、月、の、城、小、ハ、山
中、松、之、助、と、い、ふ、小、を、居、ま、し、ら、せ、江、北、小、ハ
へり、給、ふ、く、有、り、ぬ、明、太、守、の、春、又、播、磨、の
國、小、趣、也、但、馬、因、幡、の、二、の、國、を、し、た、お、へ、人、と

出づ給ふ播磨賀古川ふいたりし折ふし、別所
小三郎といふ武士、東播半國を知り、家々こ多
勢ありて、三木といふ所を城構へ有りし所、安
藝國毛利右馬頭輝元主を以てかたらひて、香
吉を背きぬ、國人かれお心ざしあるものあり
りとあん、頼るよせ戦ひ人を勢守ければ、信長
へ使を走せ、兵を請いてこよよせぬ、その中い
づくか便よからん所よこよぬ山と、小寺氏
よとはれし子、書寫山こそ僧坊もおほく糧以
下ふ富める處あれば、役替の僧どもをやらひ
や、陣所ふさだぬ、信長の御待ち給はんぬハ
志のじと答へぬれば、さらばとて書寫山への

ほりぬ、寺僧とも思ひおけされぬ、あはく身の
とつあらうドマおげまよぬること、いへば
さらあり、寺僧おとあし殺をまどきと、堅く
下知し給いけり、一條院の御堂、永延二年に、性
空上人の山をけつる所のし、観音を阿彌
女、居常の燈をか、げえへ、法の花ぶさ手向た
えず、女人の、ぼること、を留めぬを、供佛もさ
を、清のらんかし、かくぬごたま、靈地の、いま武
士おけおされ七いお人と、あるこそ、浅車一け
れ、兵の凶器ありとて、聖の御代おハ用いらぬ
こそ、理おれかくせしほど、小、毛利氏大江輝元、
吉川、小鼻川はらわらの梟を、大将とし、備前、

美作の主守善多氏直家をかたらい五六万可
任たの算勢あり、西播州に出づ、上月の城を幾重
も圍みぬ、松之助後責請れ、秀吉小寺氏と
進し加へる向ひ、高倉山小寺おこし給ふ、毛利
家大勢あれば城をかこみ責むるをばさし、分
秀吉小向い戦はんをば、その方子備をおせり、
かうく、の趣、信長御へ早馬をうたせけれ、
太郎城介信忠主を大将とし、佐久間右衛門
瀧川左近とどむけられ、信長も出立給はん、と
ありしを、此の勢ど、明石高砂の邊にあり、
高倉の表へ、行きしや、利信長御の出づ
給はんとも、折々といぬ、高倉をば退きたらむ

おふのじと、信長御のいおくりし、おのれら
おのふ子ま可せ、筑前守算を遣く心とあり
し、おの心元おあ、力おおよ、お秀吉功あ
らんことをねたみかく、休あらし、おせるとお
り、おのねたみをねえ、おほやけをおろ、お子
ること、おに、お通、おのあらざるべし、心あ
らんかくや、おあるべきと、人みおあ、おけりあ
へりと、お人、秀吉い、お子、お一、お城のお
も、おを、おみ、おか、おら、お心、おを、おみ、お給、お
お、お大勢陣を堅くおれ、お我兵、おあり、おせん
お、おお、おあるべし、お戦時、お利家の軍、おあり、お野代を
おせ、お馬草、おる下部を討ち、おぬれ、お秀吉の兵

此の物の奥もあめあへむ、をり合ひて野伏も
もせられた討ちけり、毛利家より兵ども、又か
来りけり、秀吉の軍に尾藤氏、戸田氏おとい子
子の先掛疵をおうむり、中村氏敵よく防お阿
へり、宮田氏命を失ひぬ、彼れ子是れも名を阿
らはし、祿給はりけり、かく軍におおはじ秀吉
の軍阿やうおの人とはありき、竹中某下
知をおい、その日ハくれぬ、た、かひを止ぬ
引き退くべしと、重々信長卿より使ありしお
バ力おく高倉山を退き、書寫山にお歸りぬ、城
の中にお、後責とこそ頼みしお、かく退きぬれ
ぬ、世人かたおく毛利家にお和を請ひくおりぬ、

後備中國かろべ川にお、うしなハれけるとお
ん、

太周貞頭記にお、浮田和泉守は、去年播州上
月の城にお、於て、郎等貞盛治郎四郎上月十郎矢
島五郎七等数輩羽柴お為ぬ討ち取られ、お
まつさへ自のお二萬餘の兵にお、後詰ぬせし
お、この、秀吉の智計にお、當るられ、大敗第一と違
々逃歸りし事を無念にお、思ひ付け共一分の力
お、く再戦あり難く、いかにお、す、此の耻辱を
雪お、人と心お、け居るの處お、上月の城にお、秀
吉より危子勝久并お、山中幸盛立原久綱等雲
州諸勇士籠城せりと聞えしお、バ、浮田直家思

慮を廻らし、山中鹿之助上月小籠るハ、作州小
籠入し、それより本國雲州へ切り入らんと
了簡あるべし、我を領を犯されん事と無念
れば、是れを防がん不奉の事こそあれ、尼子ハ
毛利家の宿敵より、羽柴秀吉中國へ切り入ら
んと在る者あれば、我れ毛利家不許へ、三家
の火軍を引き出せし、上月の城をせめ、燕さば
秀吉必後詰めをべければ、毛利と秀吉と戦ハ
し、女勝負の有無ふより、手段あるべしと、運
を两端小かくる工夫をなし、急ぎ毛利家不使
者を送り、織田信長の先陣羽柴秀吉、播州不下
向し、中國へ打ち入らんと、就中尼子勝久、山

中、立原の帶秀吉の先手とあり、上月の城小籠
り、雲州不入らんと企て候、急ぎ三家中御出
馬あらば、直家先陣を承り、先づ上月の城を攻
め、燕し、尼子の根株を断絶し、秀吉を討ち
取、播州、丹州毛利の御手不入らん事此の時
あり、早々御出勢然るべしと申送る、毛利右馬
頭輝元、此の事いゝあらんと、後見吉川、小早
川等と談じ決せんとす、時不今年三月、別所小
三郎長治、織田不背き、三木小籠城し、播州騷
動しけるふより、浮田直家いよく、悦び、毛利
家へ使者を以、許ふる事再三不及、別所家
より、中國へ籠城の始終注進せしむべし、毛利

去川、小早川先づ上月の尼子從^類、元就老後
の怨敵おれば、是を誅せ人事孝道あるべし、然
りといへ共、信長の代官羽柴筑前守秀吉、後詰
めせ人事必定あり、追まひ信長と東るべし、さ
おれば容易事お阿らずといへ共、又捨置れば
後患と相成るべし、然らば大軍を率一之、兼向
し、上月の城を攻め落し、尼子の根株を断たせ
んべ、再度歸陣をばおらざるの用意をせし、
向ふべしと既出張お事定まれ、且、海陸部
より八万五千餘人、此の外大将輝元三万の旗本
備中松山お控へ、一左右次等出馬せんと共、
然れば總勢十一万五千餘騎とぞ聞えし、既お

去川、小早川、浮田陸地の兵七万餘人、上月お着
陣し、之城をかこみ、先づ関の聲を攻めつけ、
山崩れ地裂くるおとあせし、まゝ、程、夥敷く
圍えし程お、總の小城お、尼子勢二万餘人籠城
おれば、此の大軍おかこまれ、之、暫時お、
おべきとは見えがかりけり、されども山中、
助大勇智謀の豪士ある故、少しお忍るゝ、色お
く、當家の怨敵毛利の大軍を引寄せ、戦ひ
人事これ悦びおれと、諸士を勵まじ、防戦の用
意ありお、堅固お、お、相待ちける、備、
手ハ関を敷し、後地の利お、依り陣取せんと、
上月の近所の狼山といふあり、上月の城お籠

而ハ、尾子勝久大将の居られども、軍配諸事を
指揮する者ハ、山中鹿之助也。是近毛利家
の數度敵討せし張本也。此カ故ニ鹿之助を指
を敵たりと思ひ居ければ、鹿を喰ふものハ狼
あり、當方狼山に陣し、上月を攻めんと、山中
鹿之助を討ち取らん事必定ありと、吉兆を賀
し、彼の山を本陣とす。然し、諸士の番手を
令けり、上月城下の押寄也。攻め動可ず、山中幸
盛自ら末配追取、諸手の持口を廻り、近付
く敵ハ大木大石を以て打ち挫く、遠きハ弓鏃
砲石を射立、透間なく防が守りあるべ、徒兵
等も義を鉄石に比し、たる者共あれば、一死賊

とあり、働きける故、善手大勢あれ共、手負死
人数多有るのみ、中々容易く落城をへり、
体見えさりけり、略下

秀吉手勢一萬三千の中、三千餘騎を竹中半兵衛重治に添へり、別所孫右衛門重棟、其の外志義の國人等二千餘人を加勢とあり、三木の城を押へさせ、自らの臺萬の手勢を黒田を始め、國人の兵二千餘人を加へ、都合臺万二千餘騎あり、上月表へ發向せり、信長公へも此の趣飛札を以て注進し、御加勢給はるべき由言上あり、斯くも秀吉書寫山を進發し、上月表に至り、高倉山の取登り、本陣を可末へ、中國勢の陣

陣を見渡せば、山より川に添ふる要害を構へ、
地の利を執い、陣を取り、七万の大軍雲霞の
如く屯せし事あれば、實に堅剛利兵と云いつ
べき形勢あり、略下
毛利三家の大軍播州へ出張し、上月の城を攻
め圍む所より、羽柴秀吉加勢を安土に顧ひし
可ば、信長公先手とし、荒木村重を差下さる
、といへども、村重異心あり、戦ひを好まず、
跡より北畠、神戶、佐久間、瀧川、惟任、長岡、氏家、安
藤、稻葉の輩二万五千餘人、追々彼の地下下向
せし、是又秀吉の下知を受け、人妻耻辱の様
に思ひ、嫉妬偏執の心あり、後詰の爲め、お末

りおのら、味方勝利の計議を思はず、我意を立
つるの氣色あり、ける故、秀吉所詮味方斯くの
如くおのら、合戦初むとも勝利を得、人事思ひ
しよらば、只信長公御下向有り、自らの諸軍
を司り、お末ハおんべ叶ふまじと工夫し、竹
中半兵衛重治を使者とし、安土へ遣はし、け
るよ、重治安土に参上せしければ、信長公西國の
様子心元おしく思し、る、をりおしおれば、早
速竹中を召出され、御圍あり、重治則別所を謀
反の初めより、中國勢出張の次第委しく言上
し、秀吉再度某を以てさし、登せ候儀ハ、追々御
加勢差下さされ、有難き仕合、大悦此の上おく奉

存候、然れば早々一戦をいどみ勝負を一撃に
決し、厄子一類を救い申度所存候へ共、前々
注進申上言仕る如く、中國勢海陸八万五千
餘人、大將輝元備中松山、新守三万餘騎を率
し、相へ居候、就中上月出張の敵將吉川、小早
川、可輩、智勇相兼ねたる者共、徒兵と強勇
なり、剽へ地の利に依り陣をとり、芝土手柵木
を以て要害を構へ、あたかも堅城に等しき用
意あり、然も總軍よく号令を守り、士卒末々迄
も心一致し、進退軽く自由をなす、天の時
地の利人の和に至る迄、敵方不悉く是れを得
たり、かゝる強敵に對し戦はん小ハ、味方の諸

勢、存命を能く守り、面々筋骨を盡すの忠心
なく、ハ勝つ事能はば候、然るに御加勢の人々
ハ、御公連御一族の尊貴に、老臣歴々の諸將
も、一人も秀吉如きの命を下さ人々あらざ、此
の故も多勢着陣ありといへども、いまだ一戦
も初め申さず、其の上敵方長陣の用意有り、
當蒙と有無存亡の軍を志す氣色あり、い
くも秀吉中國退治の將命を蒙り奉れ、命
を盛芥に比し、之役と戦ひ、運を天小任せ、勝負
を一戦に決まれば、事勿論不候へども、一人の
私を以て天下の大事を廢さべし、不あらば、若
し某彼し、不手討死仕らば、敵の勢い壯人と

あり味方ハ再戦難儀ハ及び候ハ人ハと役是
ノ勢ハを察シ合戦を慎ム居候也此の上ハ君
自ラ御出馬成し下され諸將ノ命を司り候
来ハ御下知を加へ下さるハ於テハ秀吉
先手とありテ中國勢を追崩し候ハ人等安
るべく候と述べける下也信長公聞し及一々
も至極の許へありいづれ征伐成べき敵あれ
ハ近々と出張せしこそ幸ハ我れ自ラ
馬をいだし毛利三家を以てぐべきの頃先
づ元礼半江ハ隨分慎み猥ハ合戦を初むべ
らむ中將信忠をも下向せしめられた今頃
ハ到着せべきあり我ハ下向せし信忠を主

將ト一々万幸秀吉相計のべしと仰下され早
速竹中を再度播州へ歸さる是より先北畠殿
神戶殿進發の後信長公御名代ト一々惣年の
大将小御嫡男中將信忠卿小丹羽五郎左衛門
長考を相添へられ三萬餘人と播州へ差下さ
る中將殿五月七日御養是より御下向あり播
州へ御着候りけるが秀吉の奉書寫山へ御
入有る高倉山へ出張せられ此村味秀吉中將
殿御下向とす、聊心悅び信忠卿ハ諸將の
命を司らせ一戦心よく一々上月の城兵を扱
ふべしと思ひ居たりしハ信忠卿書寫山小
つ之上月小出馬ありしハ秀吉使者と以

又、早々當所へ御出勢下さるへしと申送りし
可也、信忠卿自分出馬は、丹羽五郎左衛門
に、美濃尾張の軍勢二万餘人を差添高倉山へ
遣ハさる丹羽長秀、上月表に至り秀吉に加ハ
りしるべ、既に七万計りと有れり、中国勢と對
極の軍勢あれ共、衆人の心一致あらねば、秀吉
大い小に、信忠卿御出陣ましまさば、大將軍
と仰が一戦をべきの心ありしに、何と云當所
へ御出馬おき事をや、天の時地の利と人の和
のしを盡といへり、此三つの中の味方の一ぬ
らぬ、いゝので、強敵の向い戦ふことぬに
ハ人々、夜討等小出合が、るや、用心を在るより

外ありしと、獨つぞやき居たりけるか、る所へ
同月下旬に至り、竹中半兵衛歸り来り、信長公
の上意を述べ、是非御下向有るべき、願、それ
まど相待つべしとの御事あり、但し不時の儀
盡せば、中將殿を以て、大將軍とす、秀吉万事を
計ふべしとの御事ありと申在り、秀吉、軍
さくさればとよ、我れも其の意不、信集^忠卿の
出張を勸むれども、いかかる身もや、當表へ出
馬の儀、おく、空敷書寫山に陣した事不故、いか
んとおとせべき様ありし、徒に守り居るなりと物
語りしるべ、竹中も不審に思ひけるに、信長公
御出馬あるべき旨宣ひし事あれば、いま四五

日此の儘ならず見合せたまへかし、中将殿へハ
某参りし様子を承はるべしと云、即時小竹中
ハ書寫山へ参上し、信忠卿へ謁し、安土表の
様子を述べ、後、君當所御在陣所人より
ハ、上月表へ御出張来し事さば、味方の軍威壯
人あり、諸勢自ら勇氣を来し候ハ人と勳め
ければ、信忠卿御軍有る我れも左ハ思へども、
三木の敵徒も頼可らねば、總勢上月表あり
時、別所の一黨討ち出で、神志、志方の輩、味方
の後不掛りなれば、難儀あらんと思ふ所ゆゑ、我
れ自らの別所を征せん為、當陣を動かす奴な
り、其の上られし、上月表へ出張せば、味方の

諸勢等急ハ戦ハん事を欲せべし、父君堅く合
戦を制すれまへり、此の故ハ諸士等不慮忽の
働きざる様子と思ひ、出馬を留め居るありと
宣ひける所を、牛兵衛心中ハ、是れハ必定嫉妬
偏執の輩無益の事を勧め妨ぐるものならん
と察せしむべ、再度論をなすべし、
せり、信忠卿出馬さすハ其の故あり、佐久間、瀧
川、惟任おど、後詰、小下向せし、
の事まづ、面々の我意を任せし、秀吉ハ談を白
事あり、殊ハ老秀姫姫の心深く、其の身ハ丹州
征伐の命を蒙るといへ共、いふ事其の功を遂
げ、今度秀吉毛利家との對陣ハ、加勢を得る

一戦し、首尾よく敵を追い崩さば、其の功莫大
なり。終に中國をも劫掠せしめ、我れ山陰道
の追捕使あらば、丹波を平治し丹後、但馬、因幡、
伯耆も平治し、切り入るべきを、秀吉此の度勝利
を得ば、我が請口の雲伯國但馬を征伐すべき不
れば、我が功勞も空しくありぬべし、然らば此
此の度秀吉の功あり様、軍馬を引上りさせん
と思ひし、心佐久間龍川が輩あり何となく
脇道より秀吉の麾下に就いて御前人共無益
耻辱あらんと、物もよそへて毒氣を吹きこみ
ける、左ふさだ小姫姫の心深き佐久間信盛實
子もと思ふより、北畠殿神戸殿も平治し、秀

吉の美田の徳ハ一め、秀吉三木城の押へと
頼まれければ、是れ奇の事と收んぞ引返し、竹
中と代りて居ける處、竹中時信忠御到着あり
りける故、上月表へ出張奉り、まさば秀吉必其
の威をかりて戦ひを仰ぬらんと推量し、信
忠御をといひぬ、先秀吉承り任せし、様々
利を非し曲げざる出張を妨げ若し御出馬あり
時ハ秀吉無体し軍を勧め申べし、時小諸將等
心一致せむ、且秀吉の我意の計らひを悉く居
任へば、今も合戦を仰むる不旋るハ、其の輩
面々の心を以て無謀の軍を仕るべし、是は味
方敗軍の基あり、倍又三木の敵徒も柔弱あら

を、殊に神志、志方を如女、諸城に其の黨類擁護
り居候へば、上月表合戦をば、ドめおるに、此の敵
寺打ち出で、人事必定あり、吾等總の兵に、是
をを押し人と、是、是、是、敵兵打ち出で、おるに、上
月表合戦無き所故、おる候、彼所の戦い、初白
也、忍や神志、志方、櫛橋寺の城々より討ち出で、
て三本押への味方、討ち懸らば、城の中より、
突出し、小勢の味方防お戦、事阿れお、心
必、時々の敵徒、寺勢、い、兼じ、上月表へ進發し
味方の後よりか、ら、バ、忽ち、総敗算、お、及び、討
死、手負者、若干、お、らん、然らば、信長公の御本意、空
しく、ある、道理、お、る候、中國征伐の事、此の度、小

ハ限るべし、可ら、或、勝、お、懸、才、敵、小、向、つ、て、無、体、お、
御、を、お、る、ハ、良、將、の、せ、が、お、る、所、お、る、候、此、の、故、お、先
づ、上月表、ハ、軍、を、治、め、別、所、の、敵、を、征、伐、有、り、し、
し、り、へ、を、強、く、し、其、の、後、中、國、へ、向、ハ、せ、た、事、は、
人、事、必、勝、の、利、お、る、候、上月の城を、搦、つ、る、お、似
た、れ、ど、も、是、れ、ハ、小、事、お、し、し、愁、お、る、お、足、ら、ぬ、お、
大、行、ハ、細、瑾、を、願、ひ、お、と、申、せ、バ、是、式、の、儀、を、御
心、お、可、け、ら、る、お、心、お、可、け、ら、る、お、願、ひ、ハ、御、賢、察、お、
り、し、信、長、公、の、御、出、馬、を、も、御、制、止、あり、度、候、と、
兼、お、を、お、る、お、申、し、け、る、故、信、忠、御、實、子、も、御
承、知、あり、し、出、馬、し、ね、事、は、お、刺、へ、密、使、を、以、て、
安、土、へ、此、の、旨、言、上、下、り、し、より、終、に、信、長、公、の

御下向ハ止みし由、
信長公先日竹中不御業約有りし事おれば、不
日御下向有るべきの所、五月中雨多く、
川水満々と、御出船成り難き程ありし故、老
臣等諫めといひ、晴天を御待ち然るべしと申
在より、心おらむ御延引の折、中將信忠
御より御使者来り、先秀お制止の趣を、御自
身の御思慮より仰上られ、信長公御出馬不
及ぶ事、由御差留の使者あり、且又惟任先
秀、佐久間信盛より、同趣より御下向をとい
ひ奉りし、お、御側におある松井友閑、武井夕庵
等も、此の様子おれば、御下向然るべからむと、

色々諫め申すより、信長公も御得心有り
、出馬を止めたまひける事、是れ一生の御誤
り、一と永き弓矢の耻辱とハおれり、既し御
下向ありし、究りし、お、信忠卿、羊秀吉、元へ、
御使者を遣はされ、上月表對陣之儀、無益ある
べければ、諸將等早々軍勢を引上げ、神志、志方
の兩城を攻め落し、三木の敵を征伐すべき由、嚴
重に仰遣はさる、此の使者、急ぎ播州にお下着し、
信忠卿へ嚴命を述べければ、信忠卿、軍使を添
へられ、高倉山にお遣はされ、諸將其の表引拂ひ、
歸陣有るべしと命ぜらる、信長公の上使、信忠
卿の軍使を案じ、上月表へ趣き高倉山の

陣の至り、羽柴秀吉へ上意の趣申聞也。信忠
卿より引掛の歸るべきよし仰趣されける
事、秀吉大に驚き、是をいかにある御事を
也。数日の對陣、合戦を懼むこと、偏に信長
公の御下向を待た奉るに依り、中國勢と
初め、この對陣、追々後詰の御勢を下されず
から、一戦も遊ばず退陣せしめ、當方弓矢の
耻辱とあり、味方の柔弱を示すに似たるべし、
かく申上秀吉を初め、勇兵士並に立らまじ、君
の御下向を待ち、戦はんとして欲する所の歸陣
をべきの上意を申聞さば、勇氣を碎け、残念不
存せべきか、何故御出馬なき事、小やと、氣色替

り、尋ねけるに、使者曰く、具子細ハ中將殿へ
御書より仰遣はされたり、某も委しく存じ
申上と、蒼へこのば、秀吉風き、さあらば、某
中將殿の御陣、至る承るべし、先づ諸將、小觸
まらる、事、暫く扱へねば、我れ宜しく計
らはんとして、直上使を同道に、飾装の御陣
へ急ぎける。此の節、信忠卿飾装、御陣を後去
り、まふ不故なり、秀吉既、参考上り、信忠卿、不
謁し、曰く、信長公より上月表陣掛の儀を命
せらる、是れいかある故に候や、承り度候と、尋
ね奉りしかば、信忠卿宣はく、別の子細、あら
ば、中國勢三年長陣を、べき用意、おと出張せり

と聞く殊に當國中敵徒數多有く不時の禍有
るべければ中國と對戦此の度ハ限るハカ
らむ此の故ハ先づ上月を捨て神志方兩城
を攻め蒞し、別所を平治し、後を強くし、其の
後中國へ向ふべしとの仰なり、秀吉曰く、我ハ
君西國征伐の儀某ハ命せらる、是れハ依る中
國筋の地利幸ぬ、粗伺い探り候處、是より奥ハ
至るハ山川の嶮さ數多あり、況んや毛利の本
國居城ハ至らんを、輒く進み難く候處、今
度上月へ出張の事願ふるハ、あき事いハ候へ
ば有無の一戦を遂ハられんハ、たとへ悉く討
取る事ハ、あれたハむとも、一度追崩れハ於るハ、

後々征伐連のハ成るべし、信長公御下向未
まし、御下知を加へられ、諸勢心を一致ハ物
骨を盡さば、勝利を得ぬ事ハ、亦も候ハじ、既ハ
此の頃不時の合戦ハ、味方勝つべきの箇あり
おから、諸士の命を司るべき御大将あり故、其
の箇をはずし、候、備又上意の如く上月を引
掛い歸陣仕らば、城中毛利の為め、攻め殺さ
れん事必定ハ候、危子立從零落窮鳥の身とな
り、當家ハ屬志、信長公の武職を借り、本國ハ歸
入せん事を願ふ、慮之助等ハ、忠心を御感有、
中國退治の先手ハ加へられ、今上月の城ハ籠
るも、なれば是れを救いたまは、實、捨殺しハ

あされん事武門の恥辱當家の御名折る候
然らば毛利家と合戦の儀ハ格別厄子主従を
救はせたまひこそ、當家の御武威信義を顯
はせ道理よく候ハ玉也、庶之助の如き誠忠勇
義の士ハ當家の仁恩を施したまはば、其の身
厄子の屋おれ共、信長公の御為ハ二命を抛ち、
真忠を盡し申さん漢下仕へ歸轉を忘れさる
張子彦の信義ハも考らぬ名士ハ候へば、捨
殺さん事實ハ残念至極ニ存候、徳是ハ此の
儘引取候ハ人尋宜しき御計らいとハ申され
ば、願くハ安土へ此儀仰上げられ、信長公下向
申しまささんと、上月表へ御陣を移され諸將

小御下知ありたまはば、某等いゝおも相働き
厄子の輩を救出し候はん、然うし御屏陣未
し申す時ハおのづから御威光備はり、其の仁
徳を感念、歸服の輩多あるべく候と、利を盡し
又諷めけれ共、信忠御承引おく父君の命重
し、六陣掛いハ決まべしと宣いけるハ、秀吉
又曰、左候ハ、暫く御見合下さるべし、森山城
中へ忍びと遣ハし、庶之助等を助け出さの計
儀をおし申さん、いと申ら申しける故、信忠
御聞らば、汝左程ハ思ふおらば、早く敵ハ城
を相渡さ無事ハ連れ歸るの神策を施さし
と有りけるハ、秀吉悦び退出し、高倉山の

居陣不歸り、厄子一黨の中み、亀井新十郎茲
矩とい子者、山中松之助不歸り、城中より
密使とあり、秀吉の陣不來り、阿りける故、秀
吉則亀井を招き、信長公より後詰停止申來る
の旨委敷物語り、我々退去せば、英域目前ある
べし、勝久及び松之助討死させん事不侵の最
なり、然らば明日早天の城兵突出して其の弱
可らん敵陣不打入るべし、其の時我れ又一手
を以て此の方よりかけ入、いゝお七血戦し、
勝久松之助等を救ひ歸るべし、是れ一つ、備又
勝久松之助其の外宗徒の者一兩輩汝と俱し
夜中忍人ご當陣不來らば、殘兵ハ敵不包いゝ

助命の手段も有るべきあり、此の兩條を能く
察し、汝等を歸せぬいゝお七、城の中へ忍
び入り、松之助主従へ我の所存の程を告知し
し、お七あんなやと申されければ、新十郎承り、身を
殺し、忠を立ゝん事、某元より願ふ所あり、必
首尾よく仕負おせ申さ人と申しければ、秀吉
悦喜し、然るときは、郎等ハ何人を相伴おやと
尋ねらる、新十郎聞さゝ大野十兵衛高橋孫四
郎と申さ者、兩人百連れ候と答へければ、秀吉
則兩人を召出し、米地を賜はり、各二百石、茲矩
へハ今度無事不歸りおば、必出雲國を賜は
らん、と有りければ、新十郎拜謝し、何れお七

再度集来りて城中の有無をつげ申をべし、集
寺首尾よく城中のいらば、烽火を揚が申さ人
と約束し、六月二十三日の夜暇乞へて出行き
ける、秀吉ハその夜寝てやらむ、上月の方目
を付中待居られし處に茲に及び二人の者ハ
敵の堅陣を色々様々と艱苦し、忍び抜けし
四更の頃に至り、漸々城中に入り、烽火を揚が
し、おの、秀吉火いお安悦あり、歸りてこそハ待
れけれ

亀井新十郎茲にハ忠義ハ命を抛ち危き密使
を蒙り、さしと油断あり敵の陣々を忍び通り
往来する事度々ありし、お先日別使を遣はし

ぬるお、忽ち敵を捕へらむとせし、それより中國
勢の陣々ハ言ふお及ばむ、山谷の閑道まで伏
兵を置き、嚴重に守りける故、翼おくくハ城
中へ入る事能ハざるに、亀井ハ忍びおられ
る、うへ、運を天に任せり、忠義ハ為り往来し
る、天その志を感ずたまふお、今宵難なく城
中へ歸り入りたり、借新十郎大將略え年お
之助お向つて、秀吉の意を述べければ、奇盛大
お驚き、さるハ信長お怒りなく、諸將も歸陣し
きと、此、天あり命あり是非となり事共哉、元子
の家極運存るべし、去おお、秀吉の芳名奉し
暫く麾下お頼つる義を思ひ、一身の力お我

々を救い出さんとす、總情の程謝する所
あり、然れども其の差首の如く城兵打て出づ
る共、左計り要害に寄る陣を構へし中國勢然
も大将の思慮おれ、何れに弱き方もなし、大
敵堅陣の圍を總の兵に切り抜け、人事思ひ
よよらむ、尤秀者一手を以て突掛り、彼の人
武勇を以てせば、大将と果お救い得らん
事あるべからず、されども此の方の徒兵ハ
悉く打たれるべし、又秀者の手も討死手負多
かるべし、今當城の兵士ハ、皆是元子孫を
再興せん事を願ふ忠勇の士、是れ是れ万苦
を凌ぎ、物骨碎身を顧みず、防戦の心を盡す

ること、其の下知みず我を任する輩おれば、
総勢の死生もまた我れに在り、然るに秀者の
申さるゝ如くせば、我れ一人萬死を遁れ、一
生おぬ、獨身を立つることも、散多の諸士徒兵
を討たせ、人事將にむ首の思ひざる所あり、又
再度斯の如き忠義の士を集め、人事叶ふべ
らむ、所詮總勢とも遁れんこと能わがれば、
決して此の儀に從い難し、又宗徒の者思ひ出
ごん事も、未傳の所存も、且危し、若し通り得
ぬ、一と生捕られおぼ、未代まづの汚名後悔を
る共、益あるまじ、たとへ首尾克通り得るごと、
城兵を捨殺さん、是れお過たむ不仁不義ハ

有るべしらむ、而件共ふ其取らざる所あり、
天危子を亡したまふの存なれば、又誰を恨
むべきや、運盡きく死をいざよく見るハ将士
の本意なり、此の上ハ大将と某敵ハ傳へし切
腹とぞ、残兵の命を救ふべしと、亀井ハ向く、御
邊何卒今一度秀吉の陣ハ至り、芳志の祀をの
べ當方覺悟の次第と物語早々帰陣給出るべ
しと傳へたまへと申さしむ、新十郎再三秀吉
の芳志を述べし助命を乞ふむれども、虎之助
承引なされば、亀井泣々幸盛ハ別れを惜む、此
の時、松之助新身國行の刀を遺物として、與へ
ければ、茲に辭し、曰、某ハ測り城ハ入らぬ死を

遁る、身尤難し然るハ死身を知らざりし欲
し、腕、刀を受けしなるとい、我ハ最期まじも
貪欲の名を蒙らんこと、勇士の耻づる所なり
と申さければ、幸盛ハ義心を感じ、茲に手
取、燕涙數行不及、いけるハ漸く夜半の頃、城
を出で、難なく高倉の陣ハ歸り、羽柴ハ對面
し、松之助ハ所存覺悟の様子を述べければ、
秀吉ハ山中の士を愛し、兵を乞はれむ信義の
志を感じ、燕涙し、歎惜をいへ共、未だ如何
と申さず、様なく、愁傷限りなく、向たらぬ士
を殺さん事便なき次第あり、殊ハ信長公御出
馬なく、後詰停止ありし事、松之助ハ其の天命

あるを并へ悟るとも、残兵等の恨み思はん手
前も取り、又毛利家の輩織田の弓矢柔弱なり
と嘲けりべし、然らば何卒信忠卿を助け、一戦
を遂げ、城兵等悉く救い出さんものと思ひ、
又々竹中半兵衛を使者として、飾磨の御陣へ
遣はし、其の儀を訴へける。重治飾磨も参上し
て、處之助の覺悟の返答具の漢説を、秀吉の所
存一戦を遂げ、城兵悉く救い出し度候へば、
何卒御去馬有りて、諸将へ最重の御下知成と
下さるべき由言上しける。信忠御宣く、それ
承り、父君の命の違ひ有無の合戦と同トさ
なり、中國勢海陸八万五千餘人、上月の城を攻

め落さむ人ば退くまどとて、圍みしものを、其
の城を救い出さんとて、軍を初めおぼ、惣當家
と毛利如也を究むる大合戦とあるべし、處之
助覺悟の事あり、是れを不便なりとて、救へ
人為し戦ひを始むるは、小利大損といひつべ
し、小きを忍びざれば大謀を乱るといへり、唯
其の儘おし、歸陣をべしと命せられしは、
竹中半兵衛再三勸め申在といひ、其御承知な
さ故力おく歸りける、信忠卿より別使を以て、
上月表の諸將へ歸陣をへき由仰せ遣はさる、
竹中の急き高倉山の歸り、斯くと告ぐれば、
秀吉大下力を盡し、勝つべき軍の圖をはづさ

白、といひ當家を頼みおもふ尼子主従と
捨後しおなざる、事不仁不義の所為未代弓
矢の耻辱たる身を思召令けられざる事こそ
是理おけれと、天を仰いご長歎し庶之助等の
死せん事を惜み悲むといひ共術計畫き果せ
人方おく終り退陣の決定せり、時小六月廿八
日陣掛と定むるお諸将等ハ彼の信忠卿の御
下知を聞くより、前日より我れ先か退る人
とく陣々騒動せしお、秀吉此の引口大等な
りと退陣の謀略を廻らし、諸将お示さんと欲
在れども、嫉妬の輩おれば、差首を受けど、我意
お任せし引取らんとなすべし、然らば總軍の妨

げありと了簡し、密にお丹羽五郎左衛門長秀
を振き、申しけるハ、味方の大軍思慮おく引
退るんとせば、敵の為めお追打ちせらるべし、
多勢の引口ハ却て六ヶ敷のあり、此の故に
今宵陣々の火の光を盛んおし、兵糧支度の
体をおし、明日一戦をおむべき様子を見せお
け、然し、曉ごろより一勢こく引退るべ敵付
慕ふ事あるまじきあり、我れ又別お手段あり、
某ハ跡より退き申さるべき間、諸將形の如く計
おく退去せらる、探足下是を告げ申すへ、
尤某お申せしと宣ふ事おられ、互お君の為め
兵士損亡せざる為めなれば、只足下の思慮お

りと仰せられおべ、諸將何れも承知をべき
と申すおぞ、長秀ハ常小秀者と入魂おれべ諸
將の候如偏執を能く知り、仰の如く計らい申
さんと、ゆゑ示し合せ、長秀おれより佐久間瀧
川、安藤氏家惟任等が陣所お至り、秀吉お申せ
し如く、退口の謀事を自分お思慮せし様お談
せしおべ、各此の儀お然るべしと承知し、長
秀お智謀なりとのみおおもひ、我もくんと用意
をおしける故、秀吉此の体を見こみ、心お悦び陣
々お明日ハ上月後詰の一戦あり、面々粉骨を
盡すべしおんと沙汰せし、敵方おこれ聞か
様お計らいおければ、中國勢の陣お此の由を

聞かされお有るべき事ありと思ふ處お上方の
陣々お夜中火の光盛んおと、いふ様大勢の兵
糧支度の体お見えける故、毛利家お諸將等、實
小明日合戦有るべしと思ひしおべ、此の方お
防戦の用意せよと、いしおきく、霄より其の支
度をこなしおける、既お世入日東雲の頃より
上方勢陣々お掛つて引退く、先づ一番お佐久
間瀧川一手お成り、三ヶ月山へ引上り、諸勢お
待つ、二番お民家安藤筒井一所お引退く、三番
お惟任日向守、先手おあり、北畠中將信雄、神仁
三七郎信茂、兵を合せ退去せらる、其の次丹
羽五郎左衛門、齋藤彌兵衛一手おあり、引退

く、四番の蜂谷兵庫頭、稻葉右兵衛、五番細川兵部大輔父子三人、其の外諸勢、段々引退く、秀吉ハ先づ荒木村重を、壹萬餘人を先へ引可せ、自身ハ手勢壹万餘騎あり、山の麓へ備へ、諸勢ハ退くを見物し、有りければ、中國勢等ハ夜明け、おの定ぬ、敵打出す、ぬらんとおと、待ち居けるあり、さハおく、皆々陣を拂ひ引行く、おの、今頃退去をべし、と思ひ可けざる事、中、いよ、おしく、猿りお打く出され、せせ、見念せ居る中、お、悉く引退きたり、お、は、せ、り、雄の兵士ども、追うお、せ、人といさみ、お、れ、お、せ、秀吉山上、お、備へを、お、た、ぬ、あり、お、れ、お、は、お、り、事、お、ら、ん、お、と、う、お、い、く、進、み、得、ぬ、既、お、諸、將、等、お、り、お、き、終、り、し、お、べ、秀、吉、一、万、騎、を、三、つ、お、こ、け、く、り、引、お、し、く、難、お、く、書、寫、山、本、お、歸、陣、せ、り、

去程お上月表の上方勢、悉く陣を拂つて退去せし、お、べ、城、中、の、輩、力、を、落、し、今、ハ、轍、魚、の、水、を、望、お、べ、き、方、便、お、お、く、吐、息、の、み、つ、お、居、れ、り、山、中、お、盛、覺、悟、の、前、お、れ、お、少、し、お、愁、へ、お、危、子、左、衛、門、尉、勝、久、お、何、つ、く、教、年、の、同、流、落、し、く、辛、苦、を、凌、お、候、事、お、當、家、再、興、の、志、願、お、依、り、お、れ、お、と、今、ハ、弓、折、れ、武、運、お、盡、き、く、道、る、お、き、操、お、く、候、所、註、叶、お、ぬ、お、の、お、れ、お、敵、お、乞、お、く、君、と、某

自害を遂げ、諸士の一命を射けたまふべし是
れまふ二心なく、忠義を盡せし輩、恩賞に足
へたまはせとも、せぬく衆人の命の代り、御
生害有らん事、大将の仁心あり候と勸められ
ば、勝久のつこと笑ひ、實小よく申さるゝとの
り存、我れし左こそ思ふありとく、快く承知せ
られし程、忠之助則使者を敵陣へ遣し、曰
後詰の兵退散し、籠城の術計既し盡きぬれ
ば、快く打出で、一戦し死を潔く致さべし、此
共、所詮無益、双方の士卒数多失はんより、大
將勝久及山中忠之助、神西三郎左衛門、加藤六
四郎等、尼子義久分限帳、足軽大将百八十人、但

ノ内、美作ノ内五十二百十八石、加藤考四郎、同
四十六百十、大石村西三郎左衛門、宗徳之者五
六人、切腹仕るべき間、殊兵甚く助命あはば生
前死後の大慶毛利家の仁情、忝存せしと、誠
心を顯し、申遣しければ、古川元春より香川
兵部大輔春経、小早川隆景より平賀太郎左衛
門元祐を遣し、廿九日、則兩人上月の城にお互、
山中忠之助、奇盛、繁子、これを請じ、礼儀を失
せぬ様、すく、さく、尼子左衛門尉勝久、同助、四
郎氏、久雨人、先づ見事、切腹せられし、加
藤考四郎、政具、介錯せり、次、小股、脇の腹心の勇
士、神西三郎左衛門、元通、池田甚三郎、久規、加藤

考四郎等居並びて腹切たり、山中居之物一人
跡に残り、諸士の切腹を見せ、勝久、氏久の
首を緋の包みうやく、檢使の前、不差置
き去る。永祿七年、雲州富田落城、一門、郎等
散々、子退去し、尼子一家、一旦滅亡せしむ。其、其
の時、死する身を得、生を伴ひ、天地の間
に漂泊の身とあれども、眼有る主家の断絶を
見るに忍びを、耳有る尼子の血脈亡びしを、聞
く、小徳へを微運を、再度聞ゆる人、其の、一心堅
固の残黨を集め、漸々東福寺に出家し、あり
し勝久を、守立十餘年の間、毛利家と對し合戦
を、其の身、度々勝敗相變むと、雖勝久、初め、庶之、物

等、今日ま、ぶ、恙なく、敵對し、今、徳小、二千の、小
勢を、以て、中國勢の、七、万餘騎を、引請、六十餘日
籠城せし上、八、思ひ、出、あり、其、も、あら、む、今日、其
の、統を、断ち、我、の、聲、自、害、を、といへ、其、天命、其、れ
に、恨む、べき、方も、あり、微運、あり、其、志、こそ、遂げ
ぬ、と、也、聊、忠、義、の名、ハ、失、せ、れ、ト、也、是、れ、こそ
我、の、死、後、の、大、慶、あり、と、心中、の、滴、を、鬚、は、し
述べ、ければ、兩人、も、庶之、助、の、忠、勇、義、心、を、感、ず
歎、惜、を、斯、く、も、奇、盛、檢、使、の、控、持、し、後、腹、十、文
字、の、か、き、幼、ければ、郎、等、一、人、残、り、居、る、介、錯、せ
り、奇、盛、行、年、四、十、五、歳、智、謀、賢、く、力、有、り、其、忠、義
也、今、其、比、類、あり、能、く、士、を、盡、し、人、の、信、を、失、は

公仁有之士卒亦施之、實不知仁勇信忠の五才
を兼備せし名士を共、果報亦命限あり、天運
數を以て到し、今生衰せし身に之殘念を
若慮之助今暫く存命し、大祿を有するに
いば世の人鬼神の如く稱をべきにあらん
士を失ひぬる事敵も味方も感懐し、止まら
りしとの也、香川、平賀の兩人其の首共を取持
り、立歸り、彼等が切腹の次、其首蓋を最期の詞
奥平漢香したりければ、吉川、小早川の兩將も
感歎稱美し、なる人づく隆景の仁義を先とせ
る人おれば、尼子主従の生害を哀れみ、首共を
悉く雲州に送り、富田、月山の城下、尼子家の墓

提所成寺院に募り、供養佛事、懇情に修行させ
けるこそ殊勝を祀さるも織田家諸將、高倉
山を陣拂し、又、道口急おく、書寫山まぐり取り
けり

繪本太閤記に曰く、秀吉上月表退陣、天の
降ハ地の理おし、かを、地の理ハ人の和おし、お
かとのや、秀吉上月の後詰お向ひ、烈しく戦ふ
に、中國勢を道崩し、尼子主従を救ハんと、さ
る心盡しつれども、嫉妬偏執の者多く、陣
中更し和合せ、徒にお月日を累取けるが不圖
而然見川の合戦出来、佐久間、瀧川、筒井、粟
既、敗軍せんとするを、秀吉亦旗本の勢勇おし

と、終に對答の合戦となり、相引不引取中り、此
の合戦の最中、秀吉の計略の如く、荒木根津
守高倉山より中園勢の本陣を逆落し、討崩
さば、十分上方勢の勝利たるべきに、荒木心不
思ふに細河に於て秀吉が計不合對也、よ、元目
不見、おし居たりけるは、是非もなきことなり
けり、いかなる者の所為なり、中人、荒木分陣の
柱に狂歌し、く柳たりけり。

荒木弓けふのいくさ、不弦きれ、く射り、と為
られを引くも、い、不、れを

去程、大右大臣信長公も、不日、播州御出馬の
御進し有りけるに、中将信忠、御惟任、先考佐久

同信盛寺より、使者到着し、播州御出馬の儀
を止め奉り、先、先考が信忠御申上り、おし趣
の口上、お、上月表の合戦、こ、味方損の、お、小
く、益有る、ま、ど、く、候へ、ば、年々、ま、と、お、候、様、御
下、知、な、さ、れ、度、首、皆、一、同、お、申、上、り、お、け、れ、ば、信、長
公、も、實、お、も、と、お、思、い、け、ん、直、お、御、使、者、を
秀、吉、へ、遣、は、さ、れ、早、々、軍、勢、を、引、上、り、別、所、一、家、討
伐、お、か、ら、る、べ、き、よ、し、嚴、お、命、じ、給、へ、ば、秀、吉、天
を、仰、ぎ、長、く、歎、じ、大、事、既、お、止、み、ぬ、と、い、陣、構、い
の、用、意、を、お、し、た、り、け、り、爰、お、危、子、お、從、兵、氣、井
新、十、郎、茲、能、と、い、お、子、者、お、り、山、中、處、之、お、恥、お、辱、お
し、又、勇、猛、の、壯、士、お、り、し、お、此、の、時、陣、中、お、有、り

けるを、秀吉進く招き、之申しける。此の度、某
當城の後援、何れ、数月の間、ハカ、
此の上の、有るべき也、然りといへども、陣中の
兵士、偏執を懐き、心更、一致せざ、故に、信長公
の御出馬を、赤子事、再三なれども、侍臣、これと
拒み、御出馬の儀なきのみならず、當表の師を
せさせ、三木の城を圍むべき旨、嚴命、降下せ
り、我れ、又是をいふ人とも、あることよく、明日
ハ書寫山まで、軍勢、残らざるべし、然らば
此の城、忽ち落城し、勝之、庶之、助討死せし人、身某
深く痛み、思ふ、最上あり、汝等、をいといは、城中

へ、忍び入、庶之、助討死せし人、身某、
を、まよと、引退く、同、城中の兵士、残らざるべし、
嚴敷、當つて、戦い、抜くべし、我れ、其の時、一同、
進み、討つて、敵軍を、破り、庶之、助討死の者
を、助け、とも、書寫山へ、退くべき、同、必ず、相首
を、誤ること、おそれ、と、告が、候へ、若此の、事、敵小
も、これ、聞え、おび、謀空し、可るべし、汝等、勇、存候を
守り、此の、使を、お出、お於、之、ハ、今度の、合戦、第一
の、功、た、るべし、といふ、新十郎、大、き、山、悦び、某、此
の、仰を、蒙ること、生前の、面目、何事、可、是れ、子、云
かんや、首尾、よく、城中へ、忍び、入ら、ば、相首、の、火
を、上げ、可、申、と、之、大野、四郎、兵衛、高橋、彌、四郎、と

いへる勇士二人を引具し、夜中、敵陣を思
ひ抜く、難なく城中へ入りたりけり。借約束の
火を高く揚げ、秀吉の陣へ相面をなし、密之助
の對面し、秀吉の口上を細く演舌し、陣中の次
美諸將の不知悉く物語り、とまも籠城叶ふ事
なく候へば、急き用意をなし、明朝夜明け、
ら城内へ出て出づ、秀吉と俱に引退さ給ふべ
しと説き勧めたりける。密之助大息つき、涙
をけらくと流し、中へける。危子の運命
既に盡きたり、汝も人身をうけ、武門へ入る人
と成れり、是れも道理を知りつらん、抑我れ當
城の指籠り、毛利の大軍を引け、總計七百餘

人の小勢の、数月の間、籠城しける。兵士軍
卒、身命を悉く粉骨し、防戦を不為の故あり、
然るを我れ一人の命を全くせんと、切ら出
づ、戦ひあへば、多くの軍卒治くる者少かるべし、
楚の項羽は、江東八千の兵をたれども、江を渡
り、刺し、死せり。己の命を治きんと、多くの
士卒を捨殺さん事、土木を以て作りたる者な
りともいふ。是れを忍ぶべきの、所詮敵の大
將の包み、我れ一人切腹し、城中の先少軍卒
の命を全くし、其の志戦を報せんと、思ふ間、此
の旨秀吉に返答せべし、保あらず、汝を使たら
しめ、我れを救ひ出さんとの厚志、黄泉の下へ

おいさ、いさ計り悦び候へ人とはよき事申達せ
よかし、ハヤ刺限も後りぬらん、はや〜城中
を忍び出づ敵も見咎めらるゝふと、心を付け
〜下知在れば、鬼井新十郎理小暇に替時詞も
あがりしに、押返〜さま〜退城を勧むれ
ども、庶之助曾〜隨ハて、今ハ走べきやうなけ
れば、暇乞〜と詞をおさへ、又城中を忍び出づ
秀吉此の事を告げたるに、秀吉先鬼井不功
勞を感心し、庶之助が厚義信情を深く歎惜し、
泪流るゝこと、雨の如く、卧沈み〜居られける
お又施さへき術計おければ翌日軍を引掛ひ
自ら殿〜書寫籠城候りおたく山中庶之助

使者を以て敵陣へ申送りけるハ當城後詰の
勢退散〜と籠城の術既ハ盡き々候へハ、心よ
く討〜出づ死をいさぎよく致さべきの處所
詮切なき戦ふ双方の士將數多死せしめ人
こと便なきわが子候へば、大将尼子勝久及山
中庶之助、神西三郎左衛門、加藤彦四郎等宗徒
の者四五人、切腹いたし、士卒の命お代らんこ
とを願ふ此の儀許容阿る小於〜ハ、毛利家の
仁心厚く感心を奉る〜と申お付ければ、去川
元春、小早川隆景其の信義忠勇を甚く感じ、早
速承引の旨返答おけるおおり、翌二十九日ハ
城中の諸軍卒段々退城せしめ、其の後檢使

と賜はるべしと、毛利の陣に乞ひけるに、吉川元春より香川兵部大輔春継、小早川隆景より平賀太郎左衛門元祐兩人城中へ趣向付けられ、山中麩之助礼を乞ふに、堂上より請じ、尾子勝久、同助四郎神西三郎左衛門、池田基四郎加藤孝四郎、居並切腹せり、麩之助篤と是れを見届し、腹十文字に捨切り、永く此の世を去りしに、時小四十五歳あり、西使人人の首を取持せ、陣中より立帰り、委く最後の有様を物語れば、吉川、小早川の両将感歎せること少ありらむ、其の首を雲州に送り、富田月山の城下、尾子一家の菩提所へ葬り、講寺供養を修行せら

れける、聞く者袖を濡しけり、或説ふ、山中麩之助上月の後詰退去りければ、偽りて毛利に降参し、輝元を近付き寄り、差殺さんと計りけるに、小早川隆景麩之助の用心を察し、備中松山の麓阿井川と云ふ處に、天野中務少輔元明の命に麩之助を鉄砲にて打殺せりと云へり、然れども是れも想見記等の説を以て考ふるに、義死せること是なりと云ふ

總見記に曰く、同四月中旬、天正六年、藝州の太守毛利右馬頭輝元、播州叢向の爲め自身ハ備中國松山に至り、参陣去、先陣の両将吉川駿河守元春、小早川左衛門佐隆景相従不面々守表

此の事

田和泉守自家を始と一之、分國周防、長門、安藝、備後、備中、備前、美作、出雲、伯耆、隱岐等の國人寺數を盡し之悉く驅り盡し、都合五萬餘人引率し之、播州上月の城をかこむ、押當城ハ備前、播磨、美作三箇國の境目不之、秀吉より城主とし、山中麩之助幸盛を籠め置く、尼子左衛門佐勝久、同助四郎氏久を大将分とし、相従ふ者共、皆尼子家の浪人、立原源太兵衛、神西三郎左衛門寺數をいかに捕籠り、身命を惜まず防戦せしむ、毛利勢ハ城ハ近邊狼山の居陣せしむ、俄小堀をほり、柵堀付け之を堅くせ、羽柴筑前守秀吉亦ハ加勢荒木提津守村重等、後詰とし

之書寫山を出て之、上月ハ出張し、高倉山ハ陣取り、慶小陣所と城名の同し、能見河と云ふ大河を隔有之故、見續べき手立無之徒、小月日を送る存らば、上月鹿城疑ふべからば、大臣家多勢を以之御見續下さるべき也、由、注進申上畢ぬ、又此の城攻めの時、中及之、毛利家の兎玉小次郎守為田、英三右衛門、鉄砲三百挺を率し、秀吉の陣を襲攻む、秀吉ハ在申村、孫平次一氏不従士、藪彌次右衛門と云ふ者、兎玉と鐵砲を合せ、甚だ勇威を見せと云々、同月廿二日、大臣家京都より安土に到り、御歸城、同月廿七日、大臣家又御上京、播州上月表御人數遣さるる心す

由御付山北御手賦有之瀧川左近將監一益惟
任日向守老秀箇月何登入道順慶武藤蒲平兵
衛等真先小播州下向、其の後又御付下向の
面々、北畠殿、仲江殿、織田上野介殿、長岡兵部大
輔、藤原蜂屋兵庫頭賴隆、氏家左京亮、安藤何賀
守、稻葉何豫守、佐久間右衛門尉守、一日二日路
相隔り馳下り、五月上旬各播州上月下着、高倉
山の陣取小相加る、

五月七日、播州下向勢大将と一、三、三位中将殿
兼小惟傳^位五郎左衛門長秀等總人數三萬餘人
出陣せし、女上月表へ参着、毛利勢と對陣、先
後の後詰の人數都合五萬餘人と云々、小政合

有之といへども大河を隔てたるを以て、又小
其の勝負を決しおれし、同月十三日、大倉家撰
州表御動座なざるべきの旨上意の處、九日
己の刻より雨強く降り、十三日午の刻より夜
昼五日、雨荒く降り、續き洪水夥敷出づ候、白
川、賀茂川、桂川、東ぐ一つお成り押渡し候、十二
十三兩日ハ、小路こまづ一面お流れ上り、京
都の船橋の町家推流し、水お濁る、人數あま
り損亡在所司代村井長門守新しく懸け置き
候、四條の橋押流し、早ぬ加様お洪水なりと云
へども、古へより今に至り、大臣家御進發と候
へば、御日取の目限相違なきお付さる、たとへ

洪水道絶え候とも、御舟小なりとも御動座存
さるべき歟の儀を存じ、淡島羽、宇治、横島の者
ども、小申付、數百艘の舟を拵へ、五條、油小路東
へ、櫓城を押し指置候、是等の趣言上の處、大
臣家斜あらむ御感懐畢ぬ、抑今月朔日大臣家
播州表御出馬有るべき由、御用意類並の處
御家老の願々諫言し奉るべく、藝州の毛利
十州の多勢を率し、三年長陣の用意せしめ、上
月表出張の由慥しく以て承届畢ぬ、重てり一左
右未だ先々御延引有る、諸寺御見聞の上然る
べきの由、楠長庵、菅屋九右衛門を以て言上し
及共大臣家御承外あり候を以て御出馬留

し、羽柴秀吉より進々の注進聞しぬし合せら
れ候、御出馬然るべきの由、一左右改身御動座
あり、心きの旨、相定められ畢ぬ、同月廿四日播
州羽柴秀吉より竹中半兵衛尉重治を以て中
上ぐらへ、備前國八幡山の城主御味方仕る心
きの由中越し付く、大臣家御満足遊され、羽柴
秀吉方へ黄金百枚、銀十竹中半兵衛の銀子十
枚、下之、不次身より窮歸畢ぬ、此の時迄女之
播州の様體竹中直談に委細言上せしむる者
歟、六月十六日羽柴筑前守秀吉忍く播州上
り罷上り、上月表取舍の次第一々言上す、其の
日八更に御返答ありしと云々、翌日大臣家秀吉

を以てこれ、潜り仰付らるゝ其の趣は謀略相叶
の聖地創相宜し、而して徒に張陣せしめ、日敷
を送ると云へども、其の甲斐有之まじき段、夙
し已に計りしに畢ぬ、然れども先々志方表へ押寄
せ、而て城攻め破り、其の上より三木取詰然るべ
きの旨は御出書、此の旨承伏せしめ、同日播
州表罷り歸り畢ぬ。

同月廿一日、大石家宗部より安土に到り御帰
城、同月廿二日、上月表後詰の詰率志引掛り于
新瀧川、惟任、惟位等三日月上へ初手より引上げ
羽柴範前守荒木權時守へ高倉山より人数引
あげ、後手の人数頗る少く書寫山下

到り引取畢ぬ、是より先秀吉上月の城主山中
左助の聲、亀井新十郎、茲矩を根と曰く、當城後
詰停止の岡、近日落城し、且之左助絶命す、至ら
人事不便の最たり、連日制限を相定め、左助人
数をまとい、城中を突出ぶ戦いぬくべし、我
と其の時一同小力を合し、高きより登り兵を焚
し、之敵陣を馳け破り、左助を携へ引取るべし、
若此の儀敵に漏れど、其の謀空しあるべし、改
忠勇を盡し、城中へ入る此の事を告ぐ人々
と、新十郎これを辭せば、我れ此の命を蒙るこ
と、最以て本望あり、急ぎ敵陣を忍び通り、城中
に到着せば、相齒の火を揚ぐべし、ふりといふ、

秀吉是れを感ず、大野十兵衛高橋彌四郎を相
添へ、亀井と三人夜中忍人ぞ敵陣を通りぬけ、
上月の城に入りて相首の火をあが秀吉の命
を述べ、三使軍議の上、毛利を白く城兵七百
餘人、今近身命を委ね、粉骨を盡し、忠戦を勵
む、其の死生我れにあり、我れ今突戦し、萬死
を脱去、獨身を立て、一生に何の敵多勢前後
を遮り、城中の厄幼女性一人も生くべからず、
是れ人を取らざる者の忍びぶる所なり、只敵將
に乞請す、我れ一人切腹せしめ、城中の貴賤の
命を助け、忠戦の義を報せん、一のむと云
ふ、三使是れを諫むれども、毛利是れを聽かず、

終り是れを以て秀吉十返答を、亀井新十郎夜
中又城中を忍び出づ、味方の帰る此の由を秀
吉に述べ、遠く秀吉、亀井の勇義を感ず、且毛利の
忠死を感ず、甚歎惜せしむといへども、術計
窮り盡き、又如何とせしむ、今日終り
兵を將ゐる高倉山を陣拂き、翌日毛利寺盛、口
人切腹し、城兵貴賤の命を助け、寺盛も忠義
誠し、是れ惜むべきの甚しきあり、又或説曰く、
毛利寺盛、偽りて毛利家を降り、宿敵と指違へ、
死せんことを心とし、一旦降参、出城の處に
毛利家の諸將此の内意を察し、毛利を放
さず、終り備中、國松山の懸河井の渡りと云ふ

所_レ於_レ天野中務少輔元明_ノ命_シ、庶_レ助_ヲを誅
せ_レむと_モ云_ヘり、凡_ソ此_ノ人_一世_ノ勇_功を
乃_レある_ニ、今_ク凡_士の所_為に_レ阿_ラむ、大_力と云
い_智謀_トと云_い、君_ノ味_ヲを_レ尽_スと云_い、士_ノ命_ヲを_レ喪
むと云_い、人_ノ信_ヲを_レ施_スと云_い、誠_ニ一_々の美
談_台頭_ト及_ビい_ハれ_し、其_ノ上_ハ種_姓ハ_レ佐_々木
同_流の源_氏あ_レば、人_ト耻_づべ_キ所_{あり}、大_歎
か_ハし_きハ、武_運の独_リ計_ナり、庶_助若_シ今_姑
く大_祿を有_ルる_ニ至_ラば、世_人鬼_神の如_クに
稱_ズべ_キを、可_惜勇_士を失_いけ_ると_ク、敵_ト味
方_ト感_ゼしと_{あり}、
安_西軍_策小_曰く、去_ル程_ニ元_子左_衛門_尉勝_久

ハ、杖_柱と_モ頼_マれ_らる、羽_柴苑_前守_、荒_木提_摩
守_其の外_後詰_の歴_々志_引退_きけ_れば、網_裏の
魚_の如_クに_レ成_りに_レ中_ら、山_中庶_助より元_春
朝_臣、隆_景朝_臣へ、今_度當_城籠_城の儀_、全_ク勝_久
所_存に_レ非_ズ、神_西三_郎左_衛門_尉所_為に_レ、彼_ノ
者_自害_させ_可申_勝久_己下_一命_ヲを_レ被_賜候_への
し_と再_三懇_望し_けれ_共、承_引し_給ハ_おれ_ば、庶
助_勝久_小向_い、今_ハ無_力御_腹取_れ候_へ、自_レ御
供_可仕_候へ_共、不_顧耻_辱降_人小_出ぐ_何と_ぞ元
春_小近_付き_刺達_へ、勝_久の雙_ヲを_レ報_せん_と申_し
ければ、勝_久我_れハ_料藪_行脚_の身_と成_り、生
涯_と可_送渡_小其_ノ方_の依_若志_一度_元子_ノ大

將の号を汚る事生前の本懐不過之、唯今角成
る事弓矢智謀の不足、非也、天運不道所也、如
何事も命を全うし、時節を窺ひ揚義兵、厄子の
家再興こそ何より以て忠勤たるべけれと宣
ひ、七月三日勝久自害し、給へば、厄子助四郎、加
藤孝四郎切腹を、神西三郎左衛門、一日先立
て七月二日自害したり、此の人々の首を敵
陣へ送りけり、城中の者悉く命を救ふに
其の後山中、鹿助の降人、不内り、出でたるが
元春朝臣へ對面の時差違へ、人と兼日え、一
一、間隔り、對面を給ひ、殊に、苗衆稱目を付け
れば、思ふ所の不似打ち過すけり、其の後粟屋

考右衛門、山縣三郎兵衛を差添へ、藝州へ差下
り給ふ處、河討果之者、天野紀伊守の嫡子中
務元明の被仰付たり、備中國阿井の渡り、
鹿助の家人を、表先へ渡し、鹿助のハ後藤柴
橋と云ふ者、唯二人仕置れる、鹿助川端の岩小
腰掛たる處を、河村新左衛門と云大剛者、時分
ハ能きと思ひ、後より丁と切る、さきかの鹿助
不思寄折おれば、あつと云ひ、下ある河へ飛
下る處を、河村、鱒い、飛たりけり、福岡考右衛
門も、あたり、不徘徊しける、此の由を見、飛
下り、鹿助の頸を、取れける、立原源太兵衛ハ
忍人、ご上方へ上り、蜻須、質考右衛門を、頼み居

けると云聞えし、

重修真書太閤記に曰く、安土より再び筑前守
の許へ使者を以て上月表し對陣し、徒に日
を費すこと益あきらざと云ふべし、早々引掛
り書寫山本陣へおへり、其の勢を以て神志、志
賀田兩城を落し、三木の別所を制すべし、由を
仰下され中將信忠のもとへ、同様にこれを
下知せられけるおかり、信忠より筑前守並
に佐久間、瀧川に觸れられしお心、考書大いお
驚きこは、おいおある御趣意おや、中國勢十
萬お餘り、出陣し、味方おまた對々の勢を以
て、こゝお打て出でいおが一度お戦を挑ま

せ、勝敗の機を顯は、お及ばず、兵を引き、甲を
纏め、遠く退かんこと、弓箭とる身の耻辱と
いおべし、かくお此の後何と、中國お何
お、合戦をいたし候はんや、此の供お退陣
いおお、執念お存おといへば、使者いおさま
筑州の仰せらるゝところ、其の理あり、但、委細
ハ安土より中將殿へ御書の参り、候へば、其
の御書お、お書きつく、申され候らん、人
お、お女と答へけるお、より、筑前守、其の使と共
お、中將殿の本陣、飾磨へ、伺候、上月の陣を、拵
お、お別所を、うら、との御使、お、こまり、候、但
し、何と、いお、御事、お、左様、お、火急、お、仰下され

しやらん、具さし申さ承らばやと存じま登
上仕候と申しければ信忠宣子様別子細女
の事あり或、中國勢三年も長陣をばし用意の
ま出張せしと聞くと故も去らば此の方
不まも後、安く對陣せんねあ三木を打落し東
播を悉く平均し之ゆるく毛利小向に候へ
との御下知ありと仰せられける所より、秀吉
さらば上月不籠り候、危子先弟をばし山中
立原お公を捨殺し申走べし不之候、阿まり
小痛ハ一き尋不候ハお、君より今一度安土
へ仰上せられ大殿の御下向ハおくと、今暫
昨上月表不御勢を致され、存先弟を助けれ

候ハんこと、弓矢神の照覽も候へ、眞實の御義
あるべく存候と、諒めしお、信忠得心なく、
いづれおも大殿の御下知の如く、早々當渡へ
参られ然るべしと仰る所より、秀吉も止人か
たお、高倉山の陣所へ歸りければ、上月より
山中お堀の龜井新十郎い死す、不慮之助の使
と、一之末、秀吉い死す、新十郎お申さける
様、信長より急不三木を攻むべき由、下知仰る
所より、我等も當表を引掛り、彼處へ向ふべき
なり、我等當表を引掛り、西川の勢急、小城を
攻むべし、若し然らば城忽ち荒れ、勝久も生
害あるべく、慮之助も討死せられん、此の事

いふ所も我念なり、因之明朝早天の城中の面々討て出で、敵陣に向ひ給ふべし、然らば某も亦同トく打て掛り、乱軍の敗れ勝久兄房（弟）の庶助等を一纏り引取らば、此の策を能く學取へて、通達ありて、手筈を違へ給ふと、約束し之を返し申る、尾子勝久山中、立原の上月籠城すと織田家の為め小境を守り人と申ひ、あらぬ其の地美作の進く、公望の通を多し便利を以て、強いに請ひて、こゝ、小辰りしおれば、筑前守ハト申あり、これを□とせ、或然りと雖もこれと接ひがれ、又味方とありし新附の者、乃心を傷る、因之援を遠く請ひて、其の味方の

ため小謀りことの厚きを鳴き、今これを推放する所、其の本心勝久及奔盛の上月を請ふ事を憚りしとせがかりし故なり、然るを此の記の作者これと云らば、多言を費し、益其の意の遠かかぬことを致さ、讀むとの丁寧又復せば、自然小其の情を得べし、
龜井新十郎城中不忍び送り、筑前守の申し、通り、庶助おかたり、明朝早天不却出で、人用意をおささば、やと勸めける所、庶助大いお驚き、信長出馬おく、秀吉ハト申高倉山不在る所、加勢ことごとく三本の城へ向ふがため、此の表を引き退くと、や、折當城ハ筑前守破却し、こゝ

捨てんと云ひしを、其請ひ受け尼子方の兵士
ばかりの籠城しつるに、今日秀吉に撥を受
く事と思ひし故あり、秀吉も亦眞實に我等
を撥の人と思ひ、籠城のはじめ二人腹
心の者を差加ふべきなり、然るを突き放し
尼子衆ばかりの城を任せしむるに、筑前守
の心をば知りたる也、然るに其の身此の表
を引掛かといふ期に臨人ぞ我等を撥に出さ
んと、阿まりに虚々しき云、條かな此の城の
籠る者ハ、侍も大将も下部も、誰も尼子重恩の
者ならざるハ、死なば一處に死なば、死す
三途を共にと契りし者なるハ、大将と幸盛ハ

かりを撥に取らんと、勇士の本意を知らさ
る者の心ぞや、秀吉左様の理に迷ふべき者な
らむ、然るに此の表の陣を引掛か陣のあきま
し、其の方を欺き、たはいひたり、まこと不
秀吉我々を撥の人と思ひ、秀吉の勢ばかり
不之、早く到着せし時、直に築と有つらん、高
倉山の峰に登り、夜に遠望を焼き、晝は人も知
りたる五色の吹貫、飄箆の馬印を押し立て、景氣
ばかりの加勢を示し、終に一度も毛利の陣に
向て軍を仕向けしことあり、吹貫は馬印にか
りて以て、中国武士を怖さんと思ひつるに、狐
狸の鳴弦が震恐る如く、江趣の侍中、落ちも

やあつらへん、両川もさき走下り虎将なり、それほ
どの意をせしむりたるべし、其の後加勢の人々
追々下着せし、躰にハ見えおろし、敵のハ、
とせおろしを以て、彌我々の如く出陣あり
し、おろしにハ知りつるあり、然るに、
川の人多く、筑前守を敵とあり、
之、織田家と仇を結ぶ人、
彼方より、
の出陣全く、
為めあるを、
味方の勢を、
々々と思ふ、
盛い、
謀せ、
り、
三軍、
秀吉、
せし、
の陣、
但、
い、
へ、
へ、
御、
仰、

盛い、
謀せ、
り、
三軍、
秀吉、
せし、
の陣、
但、
い、
へ、
へ、
御、
仰、

ふ故子、晴久並ふ某切ら出づ候に御手今あり
り我々を御引取社下候人との御旨の深
きこと、悦びお堪へ候去おら一城の士卒
尾子重忠の者あり、何を何と見令け難く候へ
ば、我々城中あり腹を切り、士卒の命を助け申
さべくと決定仕り候間、各々へ御心の儘に御
引取候べしと申し、歸をやらと出たしける
小亀井、秀吉の陣より、密助お申し儘に告
げら立帰れば、秀吉もあいなべき辞おく、信忠
も告げら加勢を猶少々も残さるべきやあど
謀りし子、信忠これと許さねば、秀吉も及ばず
然らば高倉山を引取るべし、さりならぬら西川

の衆此の方の引違くを白幕に如ことは所
べりら、如何あり、無事お引取ることを得
べし人と評定し、けるお秀吉、惟任五郎左衛門
尉長秀を招き、之申しけるに、此の大軍の思慮
なく引掛ければ、西川の先鋒必幕に乗りお
ん、固く鼻息子、今夜陣々お火の光を盛に候
つ、川中、兵糧支度の件を存し、明日朝がけお敵
陣へ取かゝる如くありべし、然せば敵陣にお
も、これを待つべき用意をあり、打く出づ人
といはなをべりら、夜にい車お出来てぬ
うち、一勢一勢手早お引取り候べし、此の謀
いかい何らんと申しければ、惟任五郎左衛門

尉尤然るべしと、同心しける所より、秀吉然ら
ば御座の思付ありし様あり、佐久間、瀧川の計
りた末へと申せし所、長秀もいふ事、黄邊
の計策といひ、役の衆例の頼坂偏執の心よ
り、宜しき謀も行はる事、然らば其の意、未
かせてんと、長秀夫より佐久間、瀧川、安藤の
陣、小いなり、退却の方便を申せし所、何も然る
べしと、陣々、火を焚き、兵糧の用意在る
や、くたしたり、ゆり、秀吉の本陣あり、明日ハ
中國衆の陣へ切入るべし、かまへく、あまへく
よくせよと、云いけるハ、敵方へ漏れよ、し
との謀あり、中國衆の陣中あり、織田方の陣

々、小修、夜火の手の盛あり、兵糧の欠度あり
心し、さされば、明日寄せ奉ると知られ、防
戦の用意をべしといひ、あくる日、小織田方の
諸將ハ、佐久間、瀧川、一手あり、三日、月山へ
引揚げ、諸勢を束つ、一番、小氏家、安藤、筒井、三
番、信雄、信春、其次、小姓、任五郎、左衛門尉、有藤、彌
平、兵衛尉、蜂谷、兵庫頭、稻葉、右京亮、五番、小長岡
兵部、大輔、父子三人、其の外、諸勢、段々、引取り
し、のべ、兩川の士共、こハ、惜敵、小欺、のれ、一、の、
さらば、跡を追う、打留、女、よ、やと、俄、小、強、き、立、て
か、も、ハ、や、遠、く、引、退、き、ま、羽、柴、筑、前、守、ハ、る、の、小
跡へ、引、下、り、一、万、人、餘、を、三、つ、小、己、け、ま、備、引、小

難おく書寫山へこえ退きたりけれ、去程の上
月表加勢と云く下着せし上方勢皆々引退き
けれ、城中の輩可ねく寛懐の上おのり、流石
心細く思ふも所るべし、山中座敷幸盛ハ、籠城
の初めより思ひ殺ししことありと云く、少し
恐れを然へて、大将尼子左衛門尉勝久ハ伺ひ、
某富田用城の後、深田流浪云く種々の辛苦を
凌ぎ候ふと、全く尼子再興の志願を達せ人為
めり候へども、今ハはや折れ違盡きく道る
べきやうあく成行き候事、戦り拙き故り候ハ
去、御家再興の志願叶ひ申在まじき、業盡時と
存候、然らば是近所従ひ候輩、忠義厚く二心お

き者あるを戦場の煙と云し候ハ人出と餘り
痛ハしく候、国々善手ハ大将と幸盛と二人
腹切之、彼寺の命を請ひ受け申さ人々と存候、
恩賞を賜ハるまじあけれ、一處ハ討死さ
せ人等ハ、大将の仁徳に候ハと動かし、
勝久莞爾と笑ひ、これこそ勝久ハ此の年月心
に掛けし所あり、早く善手へ申送るべしと云
りける山より、座敷使者を去川の許に遣ハし
申させけるハ、籠城の兵士何れも違盡き候
へば、切ら出づ思ふ程戦ひ仕るべき候へ
ども、何程切ら出づ戦ハとも益あき事不候
ハ、双方多く死傷致さ人出と不便の至り候

因之、大将勝久、同宗助四郎、通久と姉女、山中鹿
介、神西三郎、左衛門尉、加藤孝四郎、宗徒の者五
人、切腹仕るべく候間、建る所の雑兵等、命御
助、中波下候へと申遣し、けれん、元春、隆景と哀
れを催し、面々自害あり、士卒の命を助けら
れんとし、こと大将の心齋感じ入る候、腹分心
静し、生著ありべく候、五人衆の外、下旅にハ、与
矢神と照覽候へ、聊も相違なく、助命在べき候
之候と、神文と以て、返答あり、けれん、鹿助、火い
可、候、心、翌二十九日、先づ諸士卒を、段々退城せ
しめ、其の後、換使をたまたま、しと望み、けれ
ん、吉川元春より、香川兵部大輔春次、小早川隆

景より、平賀水郎、左衛門尉、元佐を遣はし、けり、
香川、平賀、堀中、入りし、可ん、山中、鹿助、出で、此
以、懇懇、之を請じ、入れ、主客の座定まり、之、後
也、大将、尾子、左衛門尉、勝久、同宗、助四郎、通久、兄弟
一時、小腹と、切りし、可ん、如藤、孝四郎、改真、介、錯
し、次、小神、西三郎、左衛門尉、元道、池田、甚三郎、久
則、如藤、孝四郎、寺居、甚心、見事、小切腹、し、けり、し
可ん、鹿助、始終、よく、見届、中、勝久、通久、の首を、斬
り、包み、換使の、前、おさし、置き、幸、盛、申し、けり、ハ、
去る、承、祿、七年、雲州、富田、落城、し、一門、郎、徒、散々
に、退散、し、尾子、家、一旦、断絶、し、及、兵、惣、れ、お、も、集
生を、食り、耻を、忍び、天地の、間、小、踏、踏、し、萍、花、浮

浪の身とありしも、横目よりその主家の廢址
を見りし君のむす、水早たまたその厄子の名字を
聞くことありし、漸々その餘黨を集め所々の残
類を催し、勝文の東福寺の喝食供のありけ
るを採り、索女、終り隠州に入り、雲州に後り、此
の十餘年の間、露の袖を片まき、箱の枕の處を
可出ち、千辛万苦を以て、今日まご二千の麻
兵を以て貴國十万の及ぶ剛兵を引受け、六十
餘日籠城せし、我等が身を取りて十分の手
柄と申さべし、穴天運至らば、主家長く断絶を
ること、怒むべきに似く、怒むべきに似く、憤
る所ある如く、子と云く、憤るべき所あり、四大今

散を五蘊皆空と云ひつゝ、腹十文字の搔切く、
うつ伏し伏せしを死にけりける、幸盛行年四
十五歳智謀かたこく、武勇世子絶たしものを
と之、香川の平賀も共、鎧の袖をぬらしけり、
西探使立帰り、勝久兄弟却腹の難並に神西、如
藤が振舞山中、松助が最後の容子、くハしく語
り出づし、おん、香川元春、小早川隆景の両将も
涙を流され、厄子主従の首備中、松山の本陣に
送り、輝元の實核に入り、其の後雲州に送り、富
田月山の城下、厄子家の菩提所に葬り、護経供
養念頃、小修業おとせたりけり、然るに、兩川も上
月の城を落ち、厄子勝久兄弟の腹を切らせ、其

の外常徒ハ士五人の首を得しハバ、連ハ上月
表を引掛ハ、是ハ備中へ引返ス、略下
○此ハ書ハ乃ハ小眞書太閤記ハ、上月ヨリ山中ノ
堀尾ハ新十郎ハ、是ハ乃ハ小眞之助ノ使ト、ハ之ハ末
乃ハ云々ト記シ、茲ハ經テ小籠城者ノ一人ハ、ハ若
くハあれトも、恐ラくハ、誤傳ハあらハん、節山ハ隨筆江
藩文學ハ桃ハ曰ク、天正六年ハ、尼子勝久ノ旗ハを奪
けテ上月城ハ不入ラんト、在ル也、立原久綱ハ、獨其
の不可ハあるトを説ク、幸盛ハ大ニ之ハを辨セ、勝
久ハ遂ニ幸盛ノ議ハを答レ、入城ハ久綱ハ依テ、尼
子氏ノ旗中一人ハを奪テ去ル、麾下ハ屬セ、一ハ女ハ
とテ幸盛ハ未レたテ之ハを拒ミ、一ハ勝久ハ間ハ入ル久

綱ハの乞ハいと答レ、堀尾新十郎ハをハ一ハ之ハハ、當ラら
しむ、新十郎ハ他人ハを以テ、之ハハ、代ハりハ一ハ女ハこと
を乞ハへトも許サず、新十郎ハ止ムことハを得テ、手
兵ハを率テ、乃ハ幸去ル、小屬ハ在ルと、此ノ説ハ眞ハあるハべシ、
陰徳太平記ハ曰ク、越テ丹波國ハ住人赤井刑部
少輔ハ幸家、萩野ハ黒右衛門ハ直正、石川彌七郎ハ繁俊、
宇野六彌ハ太、波多野ハ伯耆宗、兼ハ小但馬國ハ人垣屋
播磨守ハ同新五郎ハ、同權兵衛ハ、同軍監等ハの者ハ共、一
味ハ同心ハ一ハ之ハ、吉川元春ハへ使者ハを驅テ、申テ、
ハ、至ル丹波國ハ御馬ハを被シ、玉候ハへ面々ハ御先ハを仕リ、
愛宕山ハへ攀躋シ、京都ハを目的ハ、下ル直下ハ一ハ之ハ、諸
所ハ下手遣仕候ハ八人ハ、必勝ハの術計ハ、誠ハ小竈上ハの

壘を耕田路中不遺にるを捨ふより易く候事
人如、信長ハ定ぬる本能寺に在る、諸軍士ハ皆
嵯峨、鳴瀧邊に張り出づ陣取候べし、其の時味
方の士卒共を路中に隠し置、相首を定め、風を
待て東西の火を放ち西北より切て入り候へ
ば、如何に猛き信長あり共、一日の中不敗績に
るべく候、京都の合戦にたれ利を得候へば、逃
る敵の勢に乗りて安土山迄押入、織田の一族
根を断ち枝を枯らし候へん事、何の難き事な
らば、是非に就て近白御黄向候へりしと勅
め申けり、元春候に頼り公方義昭公へ此儀を
言上有りければ、公方何方にも元春能き不設

計候へと台命有りける間、元春先兄玉市助春
種、青彦、三郎春任、兩人を丹波、但馬、造二國人
共の申立計策の細大委く尋問し給ふ、彼己の
利失の工夫を成給ふ、赤井等ハ元春既の領
諾し給ふと聞き、大いに悦び丹波國鬼不城
を取讓、元春の本陣と在べしとて、轉と經營し、
不日成就せしむ、元春の出張を今也遣三
と待ち候たり、かゝりける所、宇長田和泉守
直家より、陰謀へ渡^送遣けるハ、厄子左衛門尉
勝久、山中忠助己下二千餘騎播州上月の城に
籠り、美作國へ入らんと欲し候、某甲一身の謀
を以て攻め落さ人尋難き不難と難と、羽柴

筑前守後詰可仁子之候左候ハ、由々敷大寺
小候條、御出馬候へ、某先陣を翔け、數代ノ御敵
元子ノ遺業此ノ時根株を被断滅候べしと被
申けり、後小此ノ謀を聞くと、直家毛利家ノ志
を盡す様ハ甚虚弱ナリ之實ハ此ノ程元子可
為小眞壁を討たせ、秀吉小上月、大島を討たせ、
無念ノ恨胸裡小充ちし、但毛利勢を引出し
元子を討つ怨讐を復し、さる其ノ後元春隆景
をバ方腹之討取是れを信長へノ恩節小可成
との隠謀ありけるとのヤ、かゝる事をバ夢小
も知り給ハ、隆景吉田へ立越、輝元朝臣と評
定有りける、直家亦申出如く、元子ハ當家累

累代ノ怨敵也、先是れを退治セ、人事當然ノ理、
萬事ノ先小置く所也と云、上月出張と被一決
小けり、因茲元春父子へト輝元隆景ト、丹州
發向をバ被延引、先播州へ上り給へと宣被
送小けり、元春此ノ由を聞と給、上月へハ各
等馳向子、近十候申じ、隆景南方ノ軍勢を被道
候ハ、守新田ノ勢を併セ、三万四五千、四万
人ノ候べし、此ノ勢小之ハ假令秀吉後詰候共、
老き事ハ候申じ、某甲ハ雲伯石ノ勢を相繼し
候ハ、人ハ二万五千、三万人ハ有るべし、此ノ
内五千、人ハ所々ノ押へ小致し候共、猶殘る所
二万五千ノ候ハ、人ハ丹波、但馬ノ國人ト一万

餘の候ハ人主兩勢を合せバ三万五六千人候
ベシ此の勢を以て愛宕山へ上りて屯を張り
候ハ信長と對陣せらるべし、同羽柴の加
勢も成る事なき、然らば秀吉勢微し、中
々後詰めせ人等不可計同、上月城ハ十日の中
に攻落せらるべし、上月落城せば三木神吉の者
又大阪の門跡等大い力を得候ハ人程も、播
磨國中の敵城ハ不致ハ明退し可申候其の時
輝元ハ旗本の勢を合せ、大坂へ漕が上り、所
跡と牒し合せ、京師を十里の内外に約し、陣
と張候へ、荒木村重と森蘭丸ハ諷し依り信
長を怨むる子細有之由を承り、信長ハ伏一人

指上せぬ事を引き、候へば、十八九の同心
をばき、吉野山へ退向、大坂、愛宕兩口より京都
へ攻め入る感い、五、八、村重と必定味方ハ
帰服せべし、左有ハ人將ハ元東味方ハ志を過
せる紀州の根柢、雜賀の者共も、彈得力馳せ加
はり候い、不人成、連と信長と鎗指し及ば候上
ハ、國家の存亡安危を此の一撃ハ決断し、之、輝
元、隆景上月へ御出張候へ、元喬父子ハ於てハ、
彌丹州へ罷上り候べしと返答し給い、けり、隆
景ハ智勇相兼ぬ給ふとハ云い、乍、殊に危し戦
を深く慎み給ふ大将とられ、上月七中、置き
乍、兄弟二子ハ分れ、大敵の信長と有無の合戦

世人亦も危く覺之位向、先上月を攻め落し、其
れより二手に分ち、丹波・播磨の兩道より攻
め上るべし、丹州出張の儀ハ少々難及延引、さ
の廿番あるまじき事又荒木味方の志あらば、
今少し渠の様体をも試み、猶堅き誓紙を以て
約を定め、其の後京都へ攻め入べし、何の道も
先上月へ上り給へと、重ねて云い送り給ふ
元春の宣く、疑い村重ハ同心せむと云ふ共不
著、此の一途村重を倚賴するを合戦ハ非也候
間、上月をたゞ攻落候へば、直に京都へ攻め
上り給へ、某ハ蒲山陰道より丹波へ攻め上り
候い、お人並、丹州・葦向の儀若今延引あるに於

之ハ、其の間、信長へ決闘え、急に追治せら
るべし、惟お、彼の國人等ハ、勢の三千共打上
せ、ねる者ハ、非れハ、國中五十日可申不可被也、
赤井、波多野等滅亡し、後ハ、丹州へ上る共、何
の益も候べき、某ハ、渠等ハ、約を堅くせし事ハ
れハ、兎角丹州・葦向ハ、治定候い、お人並と宣ひ
けれ共、危き行を捨て、全き勝を取り給へと、輝
元より、も再三使者を以て宣ひける間、元春今
ハ、不意播州・葦向ハ、決定し給いけり、
元春、元長上月可被出張返答有りしに、お、輝元、
隆景相齒を定め、藝州・吉田并、沼田城を打ち
立、お人並、吉日を撰び、天正六年三月十二日

と約せらる東南の方ハ隆景の請口おれバ、山陽道の國士、并小糠元の譜筭の侍共多く隨逐在、其の人々ハ、先徳田伊豫守元清、天野太郎左衛門元政、安藝守隆家、嫡子備前守元好、國侍ハ、三吉式部大輔隆慶、同新兵衛改慶、高野山五郎兵衛、久代新十郎、梅崎彈正忠元兼、平賀太郎左衛門元祐、子息木工頭三村紀伊守清水長左衛門長政、草刈太郎左衛門景健、小笠原少輔七郎上原右衛門大夫元祐、田沼部藏人、比喩大郎兵衛、伊勢、細川の一族、大友、志賀、杉次郎左衛門實年、仁保右衛門大夫隆康、三浦、吉田、朝倉、毛利家、旗本、小幡原、栴、坂、渡邊、口羽、國司、栗屋、赤

川、小早川、旗本、小本、架、栴、梨、包、久、小泉、破、兼、井、上、南、本、上、二、萬、八、千、騎、あり、舟、手、ハ、兎、玉、又、藏、元、元助、粟屋、ハ、藏、元、元宣、野、島、大、和、守、武、瑞、同、掃、部、助、同、三、郎、兵、衛、景、親、村、上、八、郎、左、衛、門、景、廣、同、越、後、守、浦、兵、部、丞、宗、勝、等、大、船、七、百、餘、艘、播、磨、湯、室、那波、坂、越、邊、の、浦、々、ハ、係、中、兼、べ、之、海上、を、警、固、セ、り、元、春、小、道、從、の、將、士、ハ、ハ、嫡、子、治、部、少、輔、元、長、次、男、左、近、元、元、氏、三、男、民、部、大、輔、經、訖、毛利、七、郎、兵、衛、元、康、毛利、少、輔、十、郎、元、秋、國人、ハ、山、内、新、左、衛、門、隆、直、同、刑、部、少、輔、益、田、右、衛、門、佐、元、祥、羽、根、兵、衛、助、佐、波、越、後、守、同、又、左、衛、門、部、野、添、次、郎、經、良、三、澤、三、郎、左、衛、門、為、清、嫡、子、梶、津、守、為、虎、安、道

五郎兵衛、田賀、三郎元忠、天野、紀伊守隆重、同
民部大輔元珍、三刀屋、彈正左衛門久祐、古志、因
幡守重信、湯、依波守家綱、坊、倉、播磨守盛重、嫡子
彌八郎元盛、次男、又次郎景盛、出羽少輔次郎元
祐、赤穴、右、帝亮、寺、清、有地、左近、同、左、京亮、南條、伯
耆守元續、小鴨、左衛門進元清、山田、出雲守重貞、
小森、和泉守、湯原、彈正忠元綱、吉田、肥前守、日野
左近、福賴、治郎大輔元秀、同、藤、兵衛、岡布、左近、大
夫元城、祖式々部少輔元勝、久利三河守盛勝、都
治、岡本、小末、田利、小成、吉川、旗本、小宮庄、今田、吉
川、香川、桂、小坂、伊志、袋、栗屋、森、脇、境、山縣、寺二万
三千餘騎、雲州、富田、の、月山、の、城、を、同日、打、立、

作州、高田、の、着、陣、し、隆景と打連れ、上月表へ出
張し給へ、心、輝元、の、備中、の、松山、に、如へ給ふ、字
在、因、和泉守、直家、我、の、身、に、所存、の、有、り、け、れ、ば
病氣と稱ふ、之、家、の、子、長船、記伊守、岡越前守、戸
川肥後守秀安、明石、稻、彈正景親、宇喜田七郎兵
衛、忠家、宇喜田信濃守、剛介、沼本、新右衛門、花
房、忠、守、同、助、兵衛、直次、中村、三郎、左衛門、足立
太郎、左衛門、高取、備中守、伊賀、左衛門、進、富山、半
右衛門、市五郎、兵衛、蓋田、五郎、太郎、延原、内藏、元
守、表、田、河、内、守、小原、孫次郎、入道、信、阿、橋、原、監物、
江原、兵庫守、一万五千騎、差出し、け、石、間、都、合、其
の、勢、六、万、六、千、騎、上、月、の、城、を、取、圍、む、事、編、麻、竹

葦の如し、元春の命の二宮佐渡守俊實關頭
を揚ぐる、兵總軍七万關を作る、寺三箇度、お札
に、其の聲上の非想非々想天の上、下ハ奈落黃
泉の底に徹し、奴べく覺え、夥し、元春ハ平生
敵陣に伺ひ給ふ、先昔所不負の二夫を用ゝ
後敵に可勝術を教へ給ふ、故此度力定ま
秀吉可有後詰と、總陣の廻り、お芝土手高く
上陸を深く穿ち、堀を付け、所々お柵の木結ひ
亂抗、腕と、うねり、向城の如くお構へらる、さ
隆景の陣へ仗を遣され、羽壁秀吉定め、近日
可有後詰、然れ、心懸陣の廻り、堅固に被構候へ
と、被宣送ける時節、長船記守、周然前守隆景

の本陣に侍いける、秀吉ハ先日三木城へ被
働候いし所、長治御内、の乃美兵部丞殿と申
談し、一戦を遊ば、忽突立ち、瓢箪の馬符の後、
を見候いつる、秀吉之を大いお念り、左、右、一
一戦せんと、胸懐を被踏由承候、當地へハ一
向出張候い、總陣の構強、堅固に無く共苦
く、候まじき、唯さ、置りせ給へと申し、け
れ、隆景是、互にお同心に給ひ、其の首承候い
ぬと、ハ返答有り、乍、陣外の用意ハ無かり、けり、
元春此の由を聞給ひ、大宗向、答お去、大患
不顧、小義と云へり、秀吉ハ信長お多士の中上
り撰出され、中國の先陣を奔り、播州を全く

賜い、其の威光初日の東嶺小嶺、鴻水の堤
坡を貫き勢あり者、吾國の力一之而一、家城
十里の外、不出所を敵の圍せ、後詰せざる
事、やい有るべき、増し、や別所と小迫合ふ
に負けたりと、其の事と心に掛け、有、此大
事、延引する要將、非必、今見上、後詰遠き、非
じと宣ひし所、羽柴秀吉、上月城、後詰せ、人、身
を許へ、信長卿へ、援兵を遣ひ、乞、因、茲、荒木、提、津
守、村、重、の、一、萬、騎、を、附、け、く、差、出、さ、れ、け、り、同、秀
吉、村、重、兩、大、將、と、一、く、四、萬、餘、騎、同、四、月、晦、日、上
月、へ、打、出、ご、高、倉、山、の、北、を、張、り、給、ふ、此、の、時、隆
景、の、陣、の、迫、り、と、も、最、一、く、構、へ、ら、れ、く、騷、動、也

り、恒、營、事、成、り、し、る、に、以、外、往、來、の、門、の、守、衛、の
ハ、元、春、より、^新見、左、衛、門、尉、森、脇、相、模、守、隆、景、よ
り、樽、崎、彈、正、忠、を、出、さ、れ、け、り、抑、中、國、勢、の、陣、の
次、弟、ハ、先、秀、吉、の、陣、處、高、倉、山、の、尾、續、の、ハ、守、森
田、の、勢、ハ、先、陣、ハ、中、村、三、郎、左、衛、門、二、陣、ハ、守、喜
田、七、郎、兵、衛、元、の、次、ハ、戸、川、肥、後、守、其、の、後、ハ、明
石、長、船、岡、己、下、備、前、備、中、兼、作、の、軍、士、一、萬、五、千、
陣、々、堅、固、の、構、へ、け、り、其、の、次、ハ、三、吉、平、賀、を
先、と、し、く、備、中、備、後、勢、の、陣、其、主、より、少、し、高、き
山、上、の、隆、景、の、旗、本、ハ、毛利、家、譜、代、の、諸、士、相、從
て、陣、を、取、る、元、春、の、手、ハ、上、月、山、下、の、平、地、ハ
下、り、く、杉、原、播、磨、守、盛、重、父、子、三、人、二、千、騎、也、を

はる其の次、小杉原に相備、安道五郎兵衛其
の跡、八天野紀伊守隆重、南條伯耆守、小嶋官兵
衛、山内父子等、鉤鎖連環し、陣を布す、其の後
の方、小高き峰に、元春父子の本陣を居、忽ち
各々其の地の利を逐ひ、或は岸崖溪谷に據り、
或は澤池林塘に便り、陣營堅牢に見え、これ
に、假令信長何十万を帥ゐる、出張たり、其容易
に可被破といふ見ゆ、己の秀吉後詰あれば、
信長も定め、打續い、可為出張を、後陣の大
勢不加ゆ、當城攻め、落し、心易く上方勢と
合戦せよ、と、攻手の役の士卒等、仕寄を付
寄せ、攻め、城中に、尾子家の勇士、銃兵

数を悉く在りければ、後詰の勢、力を得、
寄手の多勢を、不慮、安を先達と防禦せよ、考
考も、彼此の利を計ひ、猶味方の後陣を、未だ
未だ合戦せば、不被破、今度中國勢と初度の會
戦あれば、如何に、一し、保付、来候、一
思ひ、給ひ、諸佛諸神に祈禱、おどし、給ひ、ける、不
五月十八日、京都里村、紹巴法眼の亭、中一、連
歌の張行あり、發句、ハ聖護院宮
常磐木も、かつ、色み、在る、若葉、哉
夕かげ、ふ、あ、夏、や、来、の、露
代句、秀吉
道澄
むら、雨、の、音、し、お、と、也、奴、月、出、こ
紹巴
百韻成就、一、之、懷、紙、子、御、酒、を、添、へ、之、高、倉、山、の

陣へ進献在、又秀吉味方敵より、小堀おれば、
多勢お見え、心きたれぬ、三日月山下夜々空篝
火を焼、おせられける。

杉原橋磨守盛重ハ、敵の陣を見渡、一之立おれ
りけるが、思の者共を近付、攻守か、右時節忍
討ちさせ、人為ぬ、比本人の庫藏を穿ち
屏垣を鑽、盗賊在るをも少々ハ見遁し、風道
しした人おれ、如何おぬの秀吉の陣中へ忍び
入り、敵の用心の程をも試みおかしと下知し
ければ、承り候と、徳岡久兵衛佐田考四郎舎
弟同甚五郎、其の弟小堀別所三次兵衛、舎弟雅
樂元、安原神次郎、菊池肥前守を始、二十餘人、

五月初旬、高倉山の敵陣へ忍入りけり、さ之思
おぬ、小堀お入りしかば、一着ハ徳岡久兵衛、篝
火焼、い之眠居ける者、の頭中お打ち落、其の
隙お獲る者共、傍ある陣屋へ忍入り、手毎ハ頭
を打、けり、其の中ハ別所雅樂元ハ打刀の寸
延、珠ハ鐸大さ、お、擲、希、お、敵を取、押へ、
打、共、く、頭不落けり、既ハ陣中ハ、忍打の
入りたるを、知、手早、き、京勢おれば、得、武具取
合、せ、辨、め、さ、け、る、を、聞、き、之、二十餘人の者共ハ、
皆、洞、の、尾、崎、へ、引、取、り、け、り、此、ハ、於、こ、聞、く、ハ、別
所、ハ、頭、打、つ、太、刀、音、の、し、け、れ、ば、佐、田、考、四、郎、い
ハ、小、堀、所、鐸、お、支、へ、之、不、切、と、覺、ゆ、る、を、中、ハ、提

ゆきまねと云いけるを聞き又實れしと思ひ
首引鬮が押切り、杉原播磨守盛重が即寺別所
雅樂允備陣の真中あり、忍打の敵討り帰り候
也、哉、此れ美濃近江の弱敵あり、一般の思
ひ統へい、不覺に給ひてきむと、大音を揚中り
動り降りけり、敵軍きり其の男道在りし追
蒐けけれ共、暗さは暗し、所ハ不業あり、皆手
を空しくし、くこる打ち入りけれ、此ハ忍打ち
子也、懲りたりけり、其の後ハ高倉山の陣中ハ
槍篝火本篝火透周あり、焼き續けり、唯白日の
如くあり、され共、盛重が昔共ハ、猶も度々忍打
夜込あり、しけるあり、を、し、し、し、進み利き、幸哉

又、安き心の無りけり、去る程ハ、信長御尋が
身も近日上月表へ出張し、若川、山、早川を討ち
取るべし、先々立ち馳せ下り、秀吉が力を感せ
り、也、と下知せられける、風、遂り奴とく、惟任日
向守、筒井順慶、武藤彌兵衛、瀧川時盛等、四月二
十八日、九日の間、小打ち立ちり、五月初旬、小上
月へ着陣し、けれハ、高倉山の勢ハ、八万餘騎ハ
成り、奴相續い、信長御の二男、北畠中將、信雄、
三男、神保三七、織田上野介、永岡兵部大輔、蜂屋
兵庫氏家、左京亮、伊賀伊賀守、福葉伊豫守、佐久
岡右衛門尉、など、一日二日、路引下り、各々告
ると馳せ下り、同七日、中將、信忠、朝臣、惟任、五郎

左衛門、三万騎あり、最是あり、信忠朝臣兄弟三人、
人の信長御出張し給ふべき注進を待て、上月
八ハ可なりとて、暫提州に招へ給ひ、残る諸將ハ
皆上月へ下りし程に、五月中旬に至る、後
詰の勢乙に十萬騎に過おしけり、かく後詰の
勢ハ次第に勝りぬ、信長御又近日出張ありと
云ふを見聞さる、ハいかにも勇將の名を得る元
春、元長隆景も一日十場へ給はじと、敵も味方
と思し所も、些しと疼む体もなく、只早く城を
攻め落せ、信長を待ち受て、有無の一戦を可勵
むとて、彌城を被攻事類あり、
吉川元長、父元春に向て、敵陣の様体を見るに、

軍卒日々に加はり、今に乙に十萬に過おけり
と覺え候、是れ女に信長も近日率張可為出張間
敵勢彌増り、味方由々敵大勢に及び候に、
人形某所存の候、今羽柴前陣へ夜合戦を掛け
之切り崩し可決、一陣破れ、残黨不全習ふれ
ば、當陣をとお切り崩去候に、おに信長も中々
出張へ切り候に、然れ共、おの火勢に對し、白
晝の合戦ハ勝利危く候に、おんお、又秀吉も信
長出張無き内ハ戦を可預間、大合戦ハ被為ま
す、お、以算撃衆、夜討に過おせるハ無しと
申す事、お今の通法に候間、是非ハ一夜討と存
候ハいかりと有りければ、元春此の儀最可宜

吾もまたこゝ思ひつれ、隆景と余議し、夜戦
不存亡を可識也と宣ひ、先足立彦左衛門佐伯
源左衛門を召んじ、敵後陣も猶多勢續く也
否也、山傳いし見之可集と下知し給へば、兩
人承候と云、山陰木隠れを傳ひ、召んじ行きけ
る可、帰り参り、山の後、千本河原に伊勢衆の
と見え、五六十許陣取候、其より来り、其の
目路の及ぶ所、旗懸おこも見え候、其の
れ共飾替邊、敵充滿したる由、候と申出、
かく之元長云々、趣隆景、何の宣ひ合せ
られければ、隆景暫く屏業心養し、後、元長宣
ふ所、其の理的然たり、今、後詰の勢、信長出

張られ、殊衆多し、味方の大寺、其の人と
隊、其のさる事、其共、情思ふ、信長分國の軍
勢、大要二十萬、不可過、此の中、五万、七万、八
萬、々の壓へ、可被、先立、當地、何の所、十
万許と覺えたり、さる此の上、信長出張たり
共、敵の加増せん事、二、三万、の過、かま、其、味
方、六万餘を以、十三万の敵、其對、其、人、事、強
ち、非、可、然らば、先、元、合、戦、せ、べ、副、の、城、を
の、其、攻、め、候、人、其、當、城、へ、進、も、近、日、可、為、設、意
城、へ、蒞、ち、お、信、長、ハ、自、ら、敗、績、に、る、べ、し、全
勝、不、闘、と、云、へ、り、進、も、可、勝、合、戦、お、る、其、有、無、其
危、の、一、戦、せ、人、事、ハ、今、少、し、思、慮、可、有、守、よ、し、合

戦也人小旅も、杉原不陣取たる方より蒐ら
ば敵陣亦一段高き岸有り、其の場不真、又宇
孫田の心裡も不審し、若野心を挟み、信長も志
を廻せば味方の敗北必然なり、言以此の合戦
最危く覺え候元長重ぬき宣ふ様、隆景の御小
之の候へ共信長来りて下知せおさび、假令陣
兵ハ不徳共、味方危く候べし、如何かと申は、
今ハ秀吉將の命を蒙ると雖も、荒木惟任性位
おど同く此肩諸將多ければ、各自義と建て功
を争ふ意有りて十分の一和も非じ、信長出張
し、策の命を掌握し、而も多を以て暮を
撃つを也、彼此の勝敗不定論、何ぞ之を不殆と

云らんや、敵往長進来らば可撃と云へり、惟小
山昨日今日馳せ著きたる敵兵共ハ、人馬勞れ
果てず人、是れ其の時あり、而も雨ハ傾、天河
下りて、五月圍の目刺共不知折節あり、宇喜出
不陣より押寄せおび地の利も好し、天の時地
の利協和し、今夜討をべし、時を天の興ある
所也、是を不取の還る禍あるべし、徳下り
今度當地御叢向ハ、直家不勸め請ひ申は所不
基本下り、元春丹州出陣せさへ被留置たるハ
非也、然るも今日小豆も、ハ、直家亦胸懐影獲不
必宣い候こと、得心不仕候へと有りければ、元
春と唯何の道下も今夜一戦在ると決する外

ハ候ハジと進み給へ共、隆景ハ謀を先ハ一々
戦を急ハ在ることとを慎み給へハ、兎角此の合
戦勝利の全キ所更ハ不甘心と判し給ひ、二儀
左ハ不令なれたり、中ハ所ハ安國キ、夜合戦ハ
今夜ハ不限、何時ハ思召立人ハ可易、敵来マ
戦を挑キ、非無是、非無左マハ味方ハ戦を不好、
當城をさへ攻め落されハ、後詰ハ敵ハ自ら
退散可仕候、然らハ城を攻め取たカを勝ハ一
マ、危キ夜戦ハ、まづ御延引候ベシ、隆景ハ不負
様ハと宣ひ、元春、元長ハ可勝と宣ハ、何ハ水攻
の隅ありと雖も、亦少しハ差違あり、先全キ謀
を取り給ハ人こそ宣く候ハ、申しければ、

三言修理高此の儀誰モ尤ハこそ存候へと同
じける故、其の夜の合戦ハ止みハ、元長無
本意立歸り給ひしハ、側ハ侍いける者、其ハ宣
いけるハ、備モ今夜の合戦止みけることハ無
急ハと、強ト之隆景の癖ト一々、危キ合戦を慎
むと宣子こそ心得、其れをいかハと云ふハ、
衆を以テ寡ハ遣ふ時ハ、敵ハ怒れ全キ勝を先
ト一々、危キを慎むべし、今寡を以テ衆ハ向ハ
セヤ、十死一生の合戦を致さハ、人ハバ、いかぞ勝
利を得べきヤ、祖父元就始ハ、身より起りマ、
終ハ山陽山陰を鞭笞し、武名天下ハ覆し、事ハ、
皆是れ大敵ハ逢ひ、ハ敵の座を窺ひ、不意ハ

出づ自ら必死と決して戦ひ給ひし故、毎時勝
利を得給ひしあり、屈手かむへば有田下於て
武田を討ち、嚴島ありて陶を討ち給ふ、尼子晴
久吉田の城を圍みし時、度々此の術を用ひ
給ひし故、竟る尼子敗績しぬ、此の外不可勝計、
遠く譬をいかに、項羽の三萬を以て、睢水の敵
五十万の勝ち、韓信が背水の陣を用ひて、趙の
軍の勝つ、吾が朝の義経の鶴越を著し、八島の
内裡を攻められしも、皆小を以て大の値ふ不
ハ、危を忘れず、十死の戦をふす、備信長の勢を
見るに、已に決す、佐々木朝倉、美濃の齋藤、駿河
の今川等をして、畿内又強半、風に向ふが故、大

國二十餘を指麾し、味方ハ山陽、山陰、十箇國の
勢を催すと雖も、防長兩國の軍士の、大友が歴
へし、或し留められれば、隨逐する所ハ八州の軍
あり、此の勢を以て、信長が對し尋常對揚の敵
の着を成さんをや、争ふ得、勝利可勝理を考へ
疑を断る、無二の一戦を挑まむ人、終り得、利
事ハ不可有、此の小勢を以て、隆景の宣ふ如く
危を懐まば、唯臆するのみ以たるべし、よし此の
度ハ勝利を得る事も有り、おん、然れ共、今羽柴
と一戦して、大利を得む、三木、神城、大坂の城
共と、自ら勢い弱く成りて、敵が降りおん、然
らば、敵の小勢強大に成りて、東國悉く馳せ

従い、四國九國も恐服をへき間、直家が如き表
裡者ハ不及言昨日今日迄義を抱き信を思ふ
武士も、強小附き大不服をるハ世の習ふれば、
志を衰むる者多く出来、後ハ毛利家譜代の
士のみな成りぬべし、かく武威衰替せば、何の
時を待ち、戦利を得べきや、是れを思へば、今
夜の合戦を延引する事此の一舉、當家の武光
盈を欠ぐあるべし、又古人も兵凶器也、久則生
変、智伯圍趙、逾年不歸、卒為襄子所圍と云へり、
今戦を不挑、後然と一、何らば、信長猛勢あり、
出張たるべし、然らば、直家、忽染ハ一味、一、備
前、美作、敵と可成、同、退い、く、還る事をし得じ、又

勝久堅く守城、信長多勢あり、後、諸小ありれば、前
人の戦ふ事をし得じ、進退、惟谷り、人、事、當を
指し、賢えたり、されば、元就も、領、教、萬之衆、決
機、於、兩陣、戦、則、勝、攻、則、取、威、争、天、下、こ、と、ハ、元、春、
不及くハあり、施仁愛民、保國家、こと、は、隆景、不
一、任、在、と、宣、い、し、ぞ、か、ら、攻、戦、の、術、ハ、元、春、の、宣
ふ、旨、も、可、殺、仕、ふ、今、度、ハ、隆、景、成、敗、ハ、國、お、れ、ば、
吾、の、父、子、ハ、加、勢、お、出、せ、ね、り、し、故、押、さ、戦、を、決
する事を不得、可為合戦を延ばさ、これ、決、念、お
れ、何、の、安、國、守、め、お、動、れ、ば、指、出、で、ま、頭、を、掉、い
肩、を、擧、げ、軍、議、の、是、非、得、失、を、論、お、る、こ、そ、心、得
ぬ、隆、景、又、彼、の、侍、僧、を、用、お、給、ふ、事、不、覺、お、り、渠

ハ生小賢^ヤの^ハく辨告利^ハあれば、智略^ナなどハ
使^ハハ左^カ有^ルべし、其れさ^ハ愆^心深^キ坊主
あれば、敵^ノ所^ノ願^ニ重^寶を興^ヘ人^ノあ^ト云^ヘべ、眼^ハ
暗^レ敵^ハ可^ク與^同、却^ク味^方の害^ト成^リぬべ
し、さて^モ可^ク戰^期を延^バ在^身勇^智の不足^ハ所
致^ハ口^惜き次^弟哉^ト、頭^髮上^指目^皆盡^ク裂^けこ
怒^リ給^子形^狀、衣^至剛^ノ大^將哉^此の威^力を以
こ無^ニ小^功之^蒐り給^いふ^バ秀^吉の堅^陣ハさ
く措^きぬ、雲^ハ小^律仲^る成^陽宮^を、項^羽高^祖不^守
りたり共、忽^ハ函^谷の関^破れぬべしと見^えぬけ
る此^ノ兩^端後^ハ思^ひ見^るふ、隆^景の城^をた^し
攻^め落^さす^バ、後^詰の敵^ハ自^ら退^散を^べし、危^き

戦^を決^せん事^不可^クありと宣^ひし^ハ、券^契を合
せ^て神^妙あり、又^ハ元^長のよ^し此^ノ度^ハ合^戦利
を得^る共、今^一當^々てむ^んべ、大^軍の敵^ハ對^し
こ終^小ハ中^國弓^矢威^衰へ、直^家を始^め強^みぬ
くべしと宣^ひし^ハ、一^毫の違^却あり、何^れと未
來^ノ識^言佛^ノ記^莚等^しと、後^來の口^碑の所
傳[、]兵^家の萬^鑑ハ非^也、

同^五月^十四^日、杉^原播^磨守^盛重^ハ仕^寄より、臺
無^ノ大^鉄砲^を以^て城^ノ櫓^ハ向^て放^ちける^ハ
忽^隔の柱^一つ打^ち碎^くのみ、吉^田三^郎左^衛
門^下中^りける程^ハ、微^塵ハ成^りこ失^れけり、城
中^是れ^ヲ警^き恐^れ堀^裏ハ穴^を鑿^り身^を潛^ぬ

之、土龍の如く成り、躡居せり、鹿助下知一
之云く、杉原の臺無を以て水の手を打取るの
み、今又隅の矢倉を打破りぬ、如此あらば一
定此の口より攻め破られぬと覺えたり、誰の
ある忍子馴たらん者共、陣へ忍び入り、
彼の火銃砲を刎ね落せば、然らば兼て谷底
の數十人待ち受けて落ると齎しく城中へ
可取入、若此の臺無を取り得れば敵陣へ真逆
に打懸け先杉原の陣を可打破、殊に吉川の
仕寄間近く寄せ、臺無を以て嚴しく被攻間
還て城中ありと散々打ち立ておび、此の手
の仕寄も怖へお引き去るべし、城中運を修め

ん事ハ此の臺無を盗み取る小在り、向ハれ盗
み得よおし、盗み得たらん者おハ、校群の賞を
申し行ふべきと云いければ、忍子馴れぬる
者共、進藤勘介力石小六、堀樵大夫、伴大介等を
先と一、數十人忍び出でて、夜半計り竊り杉
原の陣へ入て見るに、仕寄番の者共、油断の体
を見えける所へ、咄と叫び、功か、れば番
の者共火いお驚き、散々お成り引きける間、其
の際小臺無を心違ひ谷へまくり落す、是れを
聞き、後の陣より夜打入たりと喚つて、静々
と渡り合ひ、逃者を押返して切り結わ所、進
藤勘介敵一人の手を負せ、勘介とハ名乗らば

一之、震動雷電助と名乗、散々小戦ひけれ共敵
大勢おれど無力と引きて帰りおけり、杉原
が郎等共敵を追散らし見れば有りし鉄砲
ハあり、こハ如何おといへば、唯今夜討の筋れ
敵盗取れりと云され共重き物おれば自由
不取可帰ハ非也、元おら小捨し置きつらん、
尋ね求めよと云、此彼所を捜しけれ共、傍小
ハ見えざりけり、盛重ハこれを見き、こハ口惜
き次美哉か、る思緒ハ、臺無を被盜責盛重
生涯の面目を失ひ、身後の耻辱あり、此ハ鉄砲
不得取逆焉れ當城を枕とす討死せ人、郎等
共一人も不残切死せよと、跳騰り々々念り

けるが、乍去先人ハ一らせず、潜小尋ね見よと
と云、忍々小尋ねけり、爰ハ今田中務少輔吉川
式部少輔香川兵部大輔ハ、一つ陣屋小會合し
る危言荒語し居ける、女おの陣の前を森
脇石見守井上肥前守二人打連し通ると云、お
れと可敷とハ思ひも不寄し、お何とす、おハ
盗みけ人、杉原よと盗まれ、ハ堪おまどき、
城中取りハ得れり共一時ハ被殺せ、小利大
損を古べきありとつぶやくけるを、今田等圍
き陣中より走出、何事ぞと同へば、さ人候杉
原ハ仕寄の臺無を城中へ盗み取る候と答不
此れを聞き、之所盜乍其の隨小てやハ可置と

三、三人の者共各鎗提中馳せ行きける所亦城
と味方との中間に三百人許真円不成之相へ
たる所、香川の郎等三宅源光、是ハ誰の手の
衆の候也と同いければ、物原の郎等壇上監物
重行の候今宵臺無を城中へ所取候是れ
を取返し不津ハ、只今當城を乘破る、又城門
を枕とし討死仕る、二つの中亦相極め候
と答ふ兵部大輔さ其れハ敵早く引取候ハ
又追掛はれ候と、ハ、監物敵をバ即時ハ
切立て候いつる程、這々城中へ逃入候と
答ふ兵部追掛はれ候ハ、定め臺無をハ捨
置き候べきぞ、能々搜し被求候へ、卒爾ある働

きし給ふなと云いける折、元長より軍使
を以て、盛重へ宣いけるハ、鉄砲取及在事を不
得心其の任域へ被兼候へ、後をバ元長詰掛中
可申也と有りければ、盛重手を合せ、腹び、手
の者共あれ承候へ、御大将よりの仰の有りけ
る也、鉄砲不得尋ハ、一人と生き、不可歸と
下知し、勇氣を勵ましける間、一手の者共ハ
悉く切岸へ付さ、盛重一言之下知を待ち
て一度亦乗り破らん、と静まり返り、相へたり、
香川の家人三宅源光、何とかし知りけん、主人
ハ離れ、今田中務長、返攻め寄せたり、城中
ハ吾等と思ハ人者あらば、出合、勝負せよと喚

ハリければ良有る城中より黒具足者たる武
者一人稽へ上り唯今今田中務と被_レ召_レ候ハ
何方の渡り候や此申某ハ寺本市允勝蓮と申
者ハ候小兵ハ候へ共一矢仕候ハ人受付
之某ハ弓勢の程を御覧候へと云いも不_レ敢_レ弦
音高く切_レ放_レつ其の矢不_レ誤_レニ宮木工助春實
不_レ鏡持たせたる力者の肩より背へ寸と射通
しける間あつと云ふ聲計し_レ鏡を被_レ所へ抛
捨違_レぬ谷へを顛び落ちしける寺本唯今の矢
ハ手答へし_レ覺_レ候今一矢仕候ハ人とし_レ又
矢取_レ打_レ響_レい射けるハ今度ハ杉原の手の者
具足者も間も無かりけるハ也、脇白の惟子者

たりけるハ白き所を也期_レけん、臍の下を後へ
完と射抜きければ是れも矢場ハ伏しおけり、
傍に居たりける熊谷新右衛門鳴呼射けり寺
本亀井、鈴木ハ高館の矢倉の上ハ之の弓精、本
間孫四郎ハ叡山ハ之ニ矢ハ二人射たりしハ
も不_レ着_レけり、と聲を上げてを答めたりける、杉
原の手ハ聲の吉田肥前守切岸ハ付ければ、彌八
郎元盛又次郎景盛兄弟と相續い_レ既_レハ乗破
るべきハ決定しける所ハ敵臺無_レ綱を付け、
忍び也か小城中へ引き上くると_レ楯柵ニ係
り_レ左_レ右_レ引_レ煩_レいたる所也、三宅源允屹と見
付け_レ、復_レハ臺無_レあり、己等一人も道在_レ来_レハ

かど旬り切ら菟る此れを聞き後より七火
勢續くを見敵ハ大鉄砲を打捨て、切岸を
這い上り城中へこそ入りふけれさこそ盛
重臺無を取返し、會誓の恥を雪めたるのみ
あ、今宵の命も治きたりとぞ見えおける、かく
こそ彼臺無帯三尺餘ある木の切櫓に係りける
を臺無筒口小縄を付し一方をば杉原お家人
入江太藏同身左衛門進二人こそ引きたり、又
一方をば今田中務七輔経忠同身の新見左衛
門尉春信是も二人こそ引きたりける、何も
不考大力おれば、曳やつと引けば、臺無今田の
方へ寄りけるを入江又足を踏張り歯を切や

つと云ひさ曳けば入江の方へ寄りけるを、互
お負けじと引き合いたり、香川是れを見、無
詮角力戦唯今敵の撞く可出小渡り合は人と
いせむ味方共の腕が、よ小不心得と制しけ
れば、今田も入江も尤也と同じおの猶も互
お通身の筋を張り力を戦せ、引きたりける
お、九鼎をも鵝毛の如くお扛ぐる許の大力お
れば、彼の木の切櫓不堪究と抜け、土治と裂け
る、大鉄砲逢の谷へお落ちおける、敵も味方と
是れを見、哀不思議の大力量哉、子賣焚燬と
踏しかくハ有るまどき物をと、目を驚おし膽
を消し、見物也、其の後此の臺無を杉原の陣

へ引き上げんとしけるに、筒口の方をば侍六
人寄りて擔けけるに、臺尻の方へ入江太藏唯
一人しり持ちたりける可、最輕けし見えたり
ければ、あつぱれ大力哉と諸人二度感稱を、
捕城中間使事、爰に城中より高倉山へ、夜々
忍んて往來する者有りと言へり、され共一定
其の首を見たりおと云ふ證據と無ありけり、
依之元長より彼の副使揃ぬ捕り候へと下知
せられければ、香川兵部大輔春繼奉行と一、
山縣源右衛門、荒木又左衛門等数人馳せ向ひ、
敵城より通路をさき山陰の木の下草隠れ、
毎夜伏兵を作りて待ち居たりけり、或夜杉原

前陣と城の中間の深谷有りける、杉原前陣
の方ある山より、時々小石のこり落つる音の
をければ、伏猪の床を替へけるおや、又鬼おど
り通ふおと、おど思ひて暫く人音を静め耳
を款く身を沈め、聞きけるお伏猪おと非だ、
兎狐おと非だ、茂りたる真高原を思ひて人の
遊り行くおと、お有りける、頼り彼の者熊谷殿
熊谷殿と二聲三聲云いけるや、聞くや、否や、伏
の者共立膳らんとしてけるを程遠く、走り懸
りたらんお、一定仕損じお人、今少し間近く
引き寄せよと、微音お成りて、制しけるお、重ね
てハ神西殿、三郎左衛門殿と云いけるを聞き

又、荒木場へぬ者おれば、人お先を不祈為と思
ひ寸と起り元長お近習荒木又左衛門長利と
名乗道左とトと追陣中たり、城中より是れを
聞き、荒木殿参り候と、鉄砲を揃へ、散々
不射掛けるお、長利少しも不疼大手を擴げ、
追ひ廻る、忍の者餘りおせ人方や無りけん、
物原の陣中へ走り入りけるを、荒木追詰ぬ、
火燒きける邊にお、槩を取り、引き伏せ揃ぬ
取り、又けり、かくり元長の前にお將之行き引居
ゑ、さう隠し、持ちたりける文を執り見る
お、相齒の文字おれば、或は円角〇科斗魚籠
の文の如くなる物耳にお、更にお佛心如來智を

不得ハ可解とあし、又文一通膚お付けたるを
見れば、今度秀吉の陣通路仕濟お於るハ、雲
州島根一郡可興と書きたる勝久の判物あり、
其の名を伊丹孫三郎と云へり、さう此の程ハ
高倉山にお在りけるかと伺へ、お、さん候五日己
前にお物原殿の陣へ秣を刈り、納ぬ申候い
つる白夫ハ毎日秣を賣り、店屋の胡餅油糰お
こを求め、助飢候いき、勝久の微運の至某お
命の盡くる所か、如此止々と捕はれ候事、此
の上ハ疾々頭を被削候へとぞ申しける、元長
左も右も盛重計い候へと有りければ、承り引
出し頸を削てぞ捨ておける、

越下高倉山の麓に一條の流あり、熊見河と
云へり、敵陣より朝あ々々此の川の臨人、馬
の四足冷し或ハ手水遣ふ者共多かりけり、此
の方面に倚り、宇喜田の先鋒作州の住人中
村三郎左衛門陣を張り、辰ねりける、彼の
敵を討ねん事を思ひ、小川の側柳原竹村の陰
に伏兵を置きければ、小早川勢井上踊兵衛は
是れにかり、相待つ所、同六月二十八日如
例高倉山より人数多く河邊へ出でたりける
を銃砲より射立、矢場は三人打ち倒れ、是れを
見ると手早き京勢あれば、取合せ打つ出づる中
村小勢あり、己を討たるべう見えける間、中村

討たをふと、出雲國の住人、実道五郎兵衛三
百許あり、助け来り、敵を打掛ふを見、又高倉
山の陣より中村孫平次、神子田判左衛門等二
三千人懸り来り、又実道の者共を圍み、一人も
不_レ残と戦ふ程、己に危く見え、おしり、伯州の
南條伯耆守、小鴨左衛門進是を救はんとい
ふ餘騎を帥ゐる渡り合ひければ、猶も難計け
れば、吉川勢も少々馳せ加はり、防戦を南條
不守に一條市助清繁、繁澤左近、元氏の手
者、江田次郎兵衛、山田出雲守、西郎、寺山田利兵
衛、岡外記、鍛冶屋市兵衛、佐伯五郎次郎、吉田肥前
守、若黨瀬尾孫右衛門、吉川勢、京都野主水兵

境孫次郎、湯頭助兵衛、遠藤彌九郎、足立彦左衛門、小早川勢小包、久内藏元、お馳也、續き、鎧を入れ、火水不成れと戦ひ、尚も難儀不見え、付れ、杉原盛重の家、人渡邊左近所、原彌太郎、入江平次、茶湯坊主の全、從庵寺助、付来り、鎧を合せ、入江渡邊所、原敵を突き、伏せ、頭を取、五味方にも、遠藤彌九郎、杉原不手の者、所、原兵庫助討死せり、爰も南條不家人、末石彌太郎、手負ひ、伏し居けるを誰とは不知、若武者一人敵の弓鉄砲兩の如くあるを、不肩走り、寄り、静々と頭を打ちける、其の後、小真黒、不鎧たる武者、鎧提げ、二王立ち、おつ、立ち、敵蒐ら

バ一鎧、不衝き、伏せ、人と相へたる、お、懸り、頭打、濟し、後打、連れ、歸り、けり、哀大剛の者、せと、諸人感稱、出、後、小名を尋ぬ、れば、頭打たる、お、福島左衛門、大次、時、小号、市松、正則、當年十八、初高、名、今一人、お、郎等の、星野、越後守也、とか、也、去る、程、不敵、勢、次、芳、不重、あり、二万餘人、上月の、郷中、お、打下し、ける、周南條、杉原、兵道、中村、お、五千の、勢、無難、押立て、られ、一太刀、打、く、お、引退き、一矢、射、く、お、逃が、退き、けり、是れを見、く、杉原、盛重、同、元盛、景盛、吉田、肥前守、河口、刑部、少輔、を、相伴ひ、二、千騎、お、打出、つる、吉川、勢、も、今、田中、務、少輔、往、來、吉川、式部、少輔、往、來、香川、兵部、大輔、春、繼、山

縣四郎右衛門春方、森脇一郎右衛門春方、新見
左衛門尉春信を先と一之、一介餘騎味方難儀
小見え候様体見計候べしと云、杉原と一手子
成りて出づるを見、天野三澤三刀屋古志益
因佐渡、其の外雲石の勢一万許續いたり、吉川
元長の兼く吉川式部少輔、香川兵部大輔を以
て杉原盛重を宣ひけるハ、秀吉後詰と一之出
張おれば定めし手詰の合戦可有之、元春隆景
ハ大将の事あり候間、容易に打出自身手をば
碎られ候へど、於元長の大将と云ふハも非れ
ば自ら手を碎き、勇の程を常勢に見せ、又秀吉
の鋒先の剛弱をも試みたり候、若足輕せり合

おど候ハ人時合戦ハ可成様体小見られ候ハ
ば、盛重急が一左右可被申、其の刻即可打出候
萬事ハ盛重を頼存する也と有りければ、盛重
中國の名有武士共多き其の中ハ、合付て其を
頼み思召られ候事、誠小弓矢取りの面目尊命畏
く候、然らば御本陣へハ途の程隔る候へば、合
戦始りて注進仕り、其の上ハ御馬を被し出候
ハ人事の往来の風ハ時刻延び候いふ人共、足
輕迫合有りて己の鎧ハ可成様体小候ハ、相
合の火二つ立候べし、其の時御物具被官
御待ち候へ、偕大合戦ハ可成と存せど、又一つ
立添可申候間、此の時御馬を被し給ひ候

へとの約束しけるが、己も今日の合戦主客三萬
餘騎互に勇氣を顯し、打出でたるを見、盛重
頼三相齒の狼烟を立ちたりければ、是れを見
て吉川治部少輔元長、金身左近元氏、其の身
民部大輔經言、急が打出て見給ふ、敵味方
上月川を隔る足輕迫合あり、盛重、吉川元身三
人の人々を待受、今日ハ某も任させ給へ、上方
勢と懸合無比類大勇を顯させ可申候、吾吉と
始めとの合戦一しほ付ければ、本陣ハハ
歸り候事トと荒涼の詞を吐い、真先ハ前ん
だり、本道筋ハ元長元身三人も折原父子南條
元身、其の外雲伯石ハ勢一萬餘騎打ち出づる、

脇々の小迫合ハ諸方の國人共、吉田旗本勢
あはれも思ふに馳せ加はり、溪々峰々ハ分れ
相戦ふ、高倉山の勢本道筋の合戦既ハ始りぬ
と見えければ、吾吉ハ勢ハ不及云、蜂谷氏家、何
賀稻葉佐久間あはれの兵共、始めと途子敵ハ
一手並見せ、勇氣を奪ひたること終ハ勝利
の術あれと、吾も吾と打ち出で、段々ハ備
へて入替々々戦人と、勇氣を合人で相へたり、
先陣ハ中村孫平次、神子田半左衛門、美藤甚
右衛門、大谷刑部少輔、木下備中守を始め、吾吉
の郎等一騎當千の兵士共、五千許ハ進めば、
二陣ハ黒田官兵衛、同吉兵衛、同兵庫助、蜂須